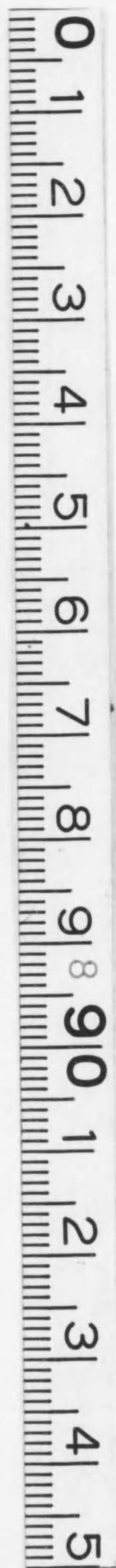


949.82-St8ウ



1200500760326

949.82
St8



始



27. 4. 8

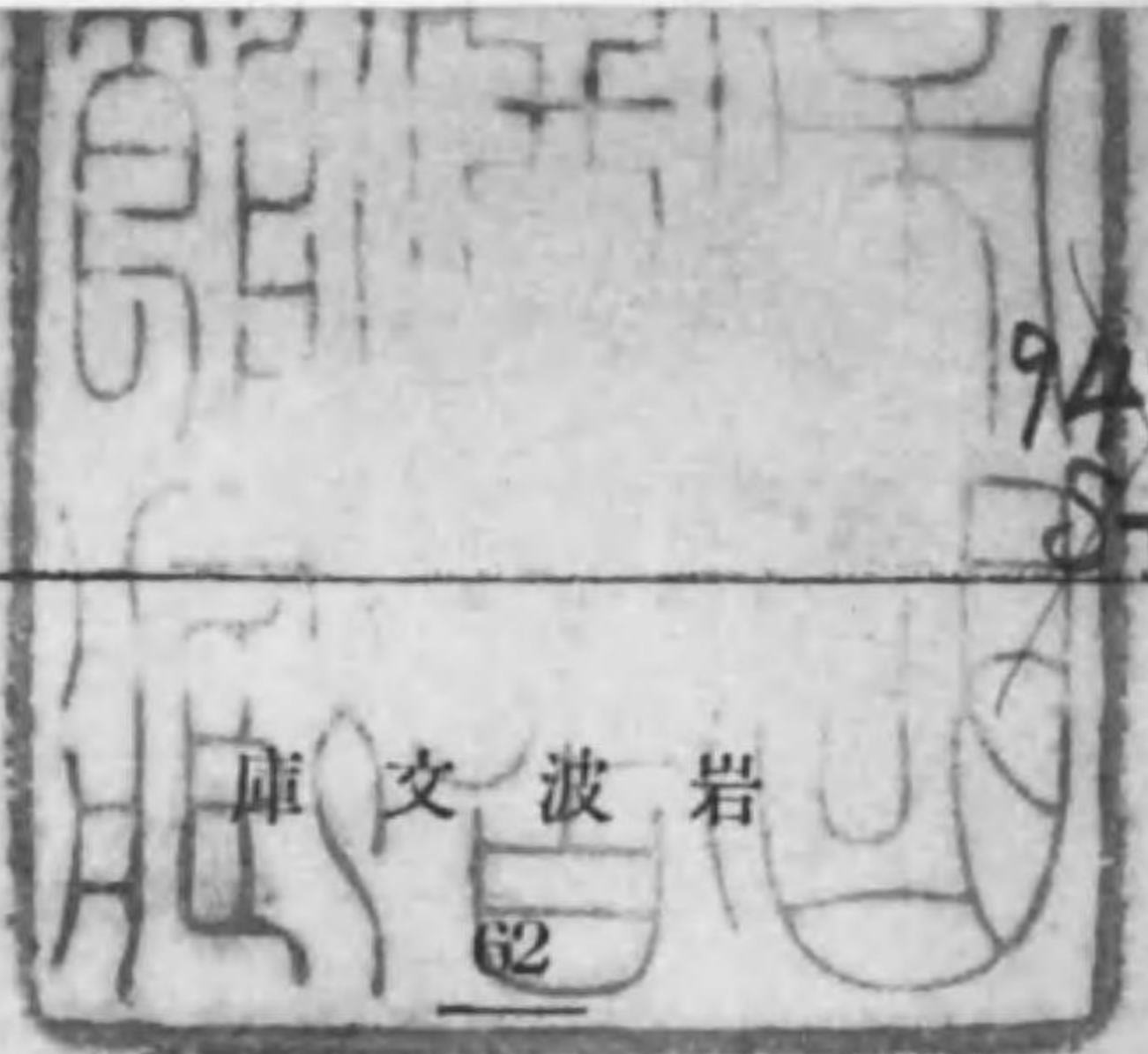
岩波文庫

62

父

作クルベトンリトス
譯隆豊宮小

岩波書店



949.82
Sc8

岩波文庫

父

949.82
Sc8

作クルベトンリトス
譯隆豊宮小



岩波書店



7-697

NEW
X.T. 9

Vertical handwritten text on the right page, possibly a library or collection number.

567~19



騎兵大尉

ラウラ (妻)

ベルタ (娘)

ドクトル・エステルマルク

牧師

乳母

ネイト

従卒

事件は現代、シユトツクホルム在にて行はれる。

全三幕を通じての舞臺

騎兵大尉の居間。正面奥右手に扉。室の中央に、新聞や雑誌を載せた大きな圓卓。右手に草張りのソファと卓子と。右の奥の角の處にタペストリ貼りの扉。左手に置時計を据ゑた書卓と家族達の居間へ通ずる扉と、壁々には武器、鐵砲や獵糞など。正面の扉に寄せて衣桁、軍服などが掛かつてゐる。大きな圓卓の上にラムプが點つてゐる。

76W10190



第一幕

第一節

大尉と牧師と革張りのソファに掛けてゐる。大尉は略服、拍車のついた乗馬靴。牧師は黒、白の襟飾、僧襟は着けず、パイプを燻らしてゐる。

大尉。 (呼鈴を鳴らす)。

從卒。 御呼びでございますか。

大尉。 ネイトは其所いらにゐないか。

從卒。 ネイトは臺所で御用を待つて居ります。

大尉。 また臺所にゐるのか。直ぐ來いつて！

從卒。 畏りました。(去る)

牧師。 何を又怒つてゐるんだね。

大尉。 あの野郎、又下女を引つ掛けやがつて。あいつ、全く箸にも棒にも掛らない！

牧師。 あのネイトかい。去年もそんな事をやつたんぢやないか。

大尉。 さうだ、君も覚えてゐるね！。だが、御願ひだ、君一つ、柔しく説諭して遣つて呉れ、

其方が屹度利き目がある！。是迄怒鳴りつけたり撲り飛ばしたりして見たんだが、何んの利き目もない。

牧師。 其處で僕に説教をして遣れといふのだな。君は、神の言葉が軍人に利き目があると、思つてゐるのか。

大尉。 そりやあ、君、僕には何の利き目もない、夫は君も知つてゐる……

牧師。 勿論、僕は知つてゐる！。

大尉。 然し彼奴には！。まあ遣つて見てくれ給へ。

第二節

前節の人々。ネイト。

大尉。 ネイト、貴様は又何をしたんだ。

ネイト。 さう申しては何でございますが、牧師さんの御出の前では、一寸申上げ兼ねます。

牧師。 おい、俺に氣兼ねをしなくても可いよ。

大尉。 白状しろ、しなけりや酷い目に遭はせるぞ。

ネイト。 はい、實は、私共はガブリエルの處へ舞踏をしに行つてゐたんです、すると、すると、すると、ルドギツヒがさう云ひました……

大尉。ルドギツヒが此事件に何の関係がある？。有の儘を云へ。

ネイト。はい、するとエムマがさう云ひました、一緒に納屋の中へ行かうつて。

大尉。ぢや、エムマが貴様を誘惑したと云ふのか。

ネイト。はい、まあさうも云へるんです。女が厭だとさへ云へば、何うにもなるものぢやないぢやございませんか。

大尉。あ、面倒だ、貴様は其子供の父なのか、父ぢやないのか。

ネイト。そんな事が分るものでございませうか。

大尉。なに？。夫が分らない？。

ネイト。え、夫は何んな事があつても分るものぢやございません。

大尉。ぢや貴様一人ぢやなかつたのか。

ネイト。其時は一人だつたんです、だからと云つて、本當に自分一人だか何うだか、分る譯

のものぢやございません。

大尉。貴様ルドギツヒにでも罪を被せたいのか。被せる氣なのか。

ネイト。誰に罪を被せて可いか、夫さへ分るものではございません。

大尉。さうか、然し貴様は、女房にするつてエムマに云つたんぢやないか。

ネイト。え、然し夫りや何日でも云ふ必要のある事でございませう……

大尉。(牧師に) まつたく堪らない！。

牧師。よくあるやつさ！。だがね、おいネイト、御前程の男なら、自分が父であるか何うか

位、分りさうなものぢやないか。

ネイト。え、そりや儘に私は關係は致しました。然し夫だからといつて其尻を背負ひ込む

には當らないといふ事は、牧師さんだつて御存知でございませう。

牧師。おいおい、ネイト、今は御前の話をしてゐるんだぜ！。御前はまさかあの女を子供と

一緒に投げ出したるんか、しやまいな！。何でも結婚しろと迄は云はない、然し子供は引きと

らなくつちや！。夫は御前の義務なんだ！。

ネイト。え、然しそんならルドギツヒにも其義務があります。

大尉。ぢや裁判にでも掛けるが可い。俺には何う處置して可いか分らない、又ちつとも關り

合ひたくもない。もう可い。あつち行け！。

牧師。ネイト！。もう一言！。ふむ！。御前は、女を子供と一緒に往來に放り出すなんて、

不名譽な事だとは思はないのか。さうは思はないのか。何うだい！。御前は、さういふ仕打が

—ふむ、ふむ！……

ネイト。そりや、私が其子の父である事が分つてゐさへすれば、處が、牧師さん、夫は何ん

な事があつても分るものぢやないぢやございませんか。自分の一生を外の男の子供を背負つて歩

行くなんざ、難有い事ぢやありませんよ。是は牧師さんだつて大尉さんだつて御察し下さらな

れば困ります。

大尉。あつち行け！。

ネイト。畏りました。(去る)

大尉。だが、臺所へ行くんぢやないぞ、横着者！

第三節

大尉と牧師と。

大尉。何うして君はびし／＼やつつかなかつたんだ。

牧師。え？。あんなにうんと云つて遣つたぢやないか。

大尉。なあんだ。君は口の内で咄々云つたぢやないか。

牧師。有體を云ふとね、何を云つたら可いのか、僕には分らない。そりや女は氣の毒だよ、無論、然しあの男だつて矢つ張り氣の毒だよ。といふのは、彼が父でなかつた場合の事を考へて見給へ！。女は育児院へ行つて四月の間子供に乳を遣つて來れば可い、さうすれば其子は一生其所で世話をして呉れる、處が彼は乳を遣る事は出來ない。女は其後で保母になつてもつとちやんとした家で好い位置が得られる、處が彼は、若し聯隊から暇でも出されば、一生浮ぶ瀬はない。大尉。さうだ、まつたくの處、裁判官の服を着て此事件に判決を下す事なんか、僕はしたくない。彼奴は恐らく口程潔白ぢやないに違ひない、然し是は分らない、が一つ、是丈の事は分かつてゐる。若し一般的に云つて誰かに罪があるとすれば、罪は女にある。

牧師。そりやさうかも知れない！。僕は誰をも審判ない！。處で、僕等は何の話をしてゐた

のかな、あんな碌でもない事件が飛び込んで來る前には。ベルタの事とベルタの堅信式の事、ぢやなかつたのかね。

大尉。いや、堅信式の事ぢやない、あの子の教育全般の事を話してゐたんだ。此家には女がうよく／＼してゐる、さうして夫がてんでに僕の子を教育しようとしてゐる。繼母はあの子をスピリチュアリストにしようとする、ラウラは繪かきにしようとする、家庭教師はあの子をメソヂイストにしようとする、マルグレット婆さんはバプテイストにしようとする、さうして下女共はあの子を救世軍に入れたがつてゐる。勿論こんな風にして一つの魂が纏り合される譯のものではない、殊に、あの子の本然を導いて行く第一の權利を持つてゐる筈の僕が、手を下す度に始終邪魔計り入れられてゐるのだから。だから僕はあの子を此家から無理にでも出して仕舞ふ。

牧師。君の家には勝手な眞似をする女が餘り多すぎるよ！。

大尉。さうだ、皆な勝手な眞似をしてゐる！。何だか虎の澤山ある檻の中に這入つてゐる様

な氣がする、眞赤に燻けた鐵を皆の鼻先に差し付けてゐるのでなけりや、僕は立處に八裂きにされて仕舞ふ！。あ、君は笑ふね、悪黨め！。僕が君の妹を妻にした、夫丈で澤山ぢやなかつたのか、夫なのに君は、旨い事を云つて、君の年とつた繼母さん迄も、僕に押つけて仕舞つた。

牧師。繼母と云ふものは自分の家に置くものぢやないよ。

大尉。さうかも知れない、然し君には餘程可い心持なんだらうね、義理の母が家にゐるとい

ふ事は、然かも他人の家に。

牧師。まあ可いさ、此世の中では皆んな夫々の十字架を背負つてゐるんだから。

大尉。さうかも知れない、然し僕の分はまつたく重すぎる。僕にはまだ其上に僕の年とつた乳母がある、此女は、僕がまだ涎掛でも掛けてゐる様な氣で、僕を扱つてゐる。そりや大變親切な女ではある、然し此家にゐるべき女ではない！

牧師。ねえ君、君は女連をもつと縛りつけて置かなけりや不可ないよ、君はあんまり勝手な眞似をさせすぎる。

大尉。おい君、云つて聞かせて呉れ給へ、何うすりや女を縛りつけて置く事が出来るんだ？
牧師。身最眞のない處、ラウラは、自分の實の妹ぢやあるが、あの女は昔から少し剛情すぎる處があつた。

大尉。そりやラウラは悪い處も持つてはゐる、然しラウラなら大して困りもしない。

牧師。おい、遠慮せずに云つて仕舞ひ給へ、僕はある女を知つてゐる。

大尉。あの女はロマンティックな教育を受けて來てゐる、だから他人の云ひなりになつてゐる再はあの女には出來ない、然し何と云つても彼女は僕の妻なんだから……

牧師。あの女は君の妻だから、だからあの女は一番可い、と云ふのかい。君、さうぢやあるまい、君を一番苦しめる者こそ、あの女なんだらう。

大尉。いや今は家中が氣が狂つてゐるんだ。ラウラはベルタを自分の傍から放すまいとする、僕は又あの子を此様な癪狂院の中に置いて置く事に堪へられない！

牧師。さうか、ラウラは放すまいとするのか！。ぢや君、是りや面倒な事になりさうだよ。あの女は子供の時分、自分の意志を押し通す迄は、壓死んだ眞似をしてゐたものだ。夫で、自分

の思ひ通りになると、夫が品物か何かだつたら、私は是が欲しかつた譯ぢやない、私の意志が通したかつたんだと云つて、其品物を返したものだ。

大尉。夫ぢや最早子供の時分からそんなだつたんだな。ふむ！。まつたく彼の女は時偶氣狂染みた様になる、急に心配になり出してね是りや病氣ぢやないか知らんと思ふ位。

牧師。だが其、ラウラが賛成しないといふ、ベルタに關する計畫といふのは、一體何んなものなんだね。到底妥協の途はないのか。

大尉。君が、僕があの子を一大天才に仕立上げようとか又は僕自身の寫しみた様な者に仕立上げようとか、そんな事を考へてゐるんだと思つて呉れては困る。僕は自分の娘の口入屋になつて、結婚の爲め計りにあの子を教育しようとは思はない、若し長い間結婚しずゐるものならあの子は不愉快な月日を送らなければならぬからな。と云つて、反對に、あの子が男と同じ仕事に脚を踏み入れる事にも賛成しない、是には長い修業が要る、夫に御嫁にでも行けば遣りかけた準備も全然棄て、仕舞はなければならぬから。

牧師。ぢや何にしようと思ふのか。

大尉。教師にしようと思つてゐる。御嫁に行かないでゐても、自分一人で喰つて行ける、夫に、自分の俸給を家族の者にも割いてやらなければならぬといふ様な、そんな氣の毒な教師に比べれば、あの子は餘つ程樂が出来る。結婚すればして、自分の知識を自分の子供の教育に應用する事が出来る。どうだ、可い考だとは思はないか。

牧師。可い考だ。然しあの子は一方に随分畫の才を持つてゐる、あれ程の才を壓へるのは、

自然を強制するといふ事にもなるだらう。

大尉。 そんな事はない！。僕はあの子の描いたものを或偉い畫家に見て貰つた、其人の説によると、あんなものは教はりさへすれば誰にでも出来る程度のものに過ぎないのださうだ。處が去年の夏一人の青二才が家へやつて來た、此奴は萬事心得てゐるものだから、素晴らしい畫才があるなどと云ひ出したんだ、其處でラウラの註文通りに事が極つた。

牧師。 其奴はあの子に惚れてゐたのかね？。

大尉。 夫りや極つてゐる！。

牧師。 おやく。夫ちやもう何うしやうもなささうだ。何うも不可ないな、夫に無論ラウラは彼方に味方があるんだらう。

大尉。 さうだ、云ふ迄もない！。もう家中火焰に包まれてゐる、夫に、此所丈の話だが、あの手合のやる事は、實際高尚な戦ぢやない。

牧師。 (立ち上がる) 君は、僕が夫を知らないと思つてゐるのか。

大尉。 君もか。

牧師。 もとは。

大尉。 然し一番不可いけないことは、ベルタの未來が、單に僕を憎むといふ心持丈けで、彼所で定めて仕舞はれさうな氣がする事だ。女だつてかういふ事も出来るあゝいふ事も出来るといふ事を男に見せてやるのだ、杯といふ事を彼奴等は我鳴散らしてゐる。男と女とが戦いくさをしてゐるんだ、絶え間なく、夜も晝も。——君も歸るのかい。不可ないよ、夕飯を喰つて行き給へ。と云つて何

んにもある譯ではないが、然し今夜は例の新ドクトルが來るんだ。君はあの人に會つた事があるか。

牧師。 通りすがりにちよいと會つた事がある。正直な締達ちぢりした人らしい。

大尉。 さうか。夫は可い。どうだらう、僕の味方になれさうな人かな。

牧師。 さあ。夫はあの人の人に關する經驗次第だらう。

大尉。 然し君は居て行かないのか。

牧師。 居て行きたいが、僕は晩食には歸ると云つて來た、歸らずにゐると婆さんが心配する。

大尉。 心配する！。怒る、と云ふが可い！。まあ、好きな様にし給へ。外套を掛けようか。

牧師。 今夜は屹度ひどく冷えるよ。ありがたう。アドルフ、もつと身體を大事にしなくては不可ないよ、随分過敏らしい顔つきをしてゐる。

大尉。 過敏らしい顔つきをしてゐる？。

牧師。 さうだ、屹度何所か工合が悪いのだらう？。

大尉。 そんな事ラウラから吹き込まれたんぢやないか。あの女は二十年來僕を病人扱ひにしてゐる。

牧師。 ラウラから？。君を見てゐると心配になるんだよ。身體を大事にし給へ！。是は僕の

忠告だよ！。ぢや君、左様なら！。だが、堅信式の事を相談する氣ぢやなかつたのか。

大尉。 いや丸で！。僕はさう思ふ、かういふ事は、政府の良心に一任して、成行きに任せて置くが可い、僕は別に眞理の證人でもなければ殉教者でもないんだから。僕等はもうそんな事に

は超越してゐる！。左様なら！。宜しく！。
教師。ぢや君、左様なら。ラウラに宜しく！。

第四節

大尉、後にラウラ。

大尉。 (書卓を開け、揚蓋の前に坐つて、計算をする) 四——三十九、三——七——四十八、
五十六。

ラウラ。

(居間の方から) 貴方御願ひでございませうが……

大尉。

今直ぐ！。——六十六、七十一、八十四、八十九、九十二、百。何だ？。

ラウラ。

御邪魔ですかしら。

大尉。

いや少とも！ 拂ひの金でも欲しいのか。

ラウラ。

え、さうです。

大尉。

帳面を置いて御置き、眼を通すから。

ラウラ。

帳面を？。

大尉。

さうだ？。

ラウラ。

何日から帳面を御目にかける事になつてゐるのでございませうか。

大尉。 今日から！。家の經濟狀態は動搖してゐる、債權者と懇談する場合には、帳面を見せ
なくてはならない、夫でなければならぬ、債權者として罰せられる計りだ。

ラウラ。

家の經濟狀態が良くないと云つて、夫は私の罪ぢやありません。

大尉。

夫こそ帳面を見れば分かる事なんだ。

ラウラ。

借地人が拂はないといつて、夫は私の罪ぢやありません。

大尉。

彼を恐ろしく熱心に薦めたのは誰だつた？。御前ぢやないか！。何故御前はあんなに

！愚迂鱈を推薦したんだ。

ラウラ。

夫ぢや貴方は又何故其愚迂鱈を御雇ひになつたんです？。

大尉。

御前達が彼を借地人にする迄は、俺は落つて飯も喰へなかつたからだ、落つて寐

られもしなかつたからだ、落つて仕事も出来なかつたからだ。御前は、御前の兄が彼と手を切
りたがつてゐるものだから、彼を雇はうとする。御繼母さんは、俺が彼を雇ひたくないと言ふも
のだから、彼を雇はうとする。家庭教師は、彼がピエティストだからと云ふので、彼を雇はう
とする。マルグレット婆さんは、彼の祖母さんの子供の時分から知つてゐると云ふので、彼を雇はう
とする。だから俺は彼を雇つたんだ。若し雇はなからうものなら、俺は今頃癪狂院の中へ這入つ
てゐるか墓の中へ頭がつてゐるだらう。——妓處に拂ひの金と、夫から小遣とがある。帳面は後
でも可い。

ラウラ。

(辭儀をする) 何うも難有うございませう！。——貴方は、家事向き以外に御遣ひに

なる金も、帳面につけて御出でございませうか。

大尉。夫は御前に関係のない事だ。

ラウラ。さうでございませうともね、丁度私の子供の教育が私に何の関係もあつては不可な
いと同じ様にね。で、貴方がたは先刻の會議で決議をなすつたんですか。

大尉。最早疾うから自分で決議はつけてゐる、俺は唯、俺と俺の家族とに共通な唯一人の方
人に、夫を報告した丈なんだ。ベルタはシトツクホルムの塾に入れる、二週間内に立たせる。

ラウラ。誰の塾に御入れになるのでございませうか、承り度うございませう。

大尉。軍法會議顧問のゼフベルクの所だ。

ラウラ。あの自由思想家の所に！

大尉。子供は父の宗旨に従つて教育されなければならぬ、と法律に書いてある。

ラウラ。夫で母は其問題に一切喙を容れる事は出来ないのだから、ございませうか。

大尉。一切出来ない！。法律的に云つて母は長上權を賣拂つて、所天が母と其子とを養ふ代
りに自分の權利を放棄した事になつてゐる。

ラウラ。では自分の子供に對して何の權利もないのだから、ございませうか。

大尉。ない、何の權利もない！。一旦品物を賣渡した以上、夫を取戻さう金も握つてゐよう
といふ事は出来ない。

ラウラ。でも雙方で、父と母とで、話し合ひをする事にしたら……

大尉。何うしてそんな事が出来る？。俺はあの子を市中に住ませようとする、御前はあの子
を此所に留めて置かうとする。數學的に云つて其眞ん中は、あの子が市と此所との丁度眞ん中に

當る停車場に止まつてゐるといふ事になる。是は何うしても解く事の出来ない結び目なんだよ！。
さうだらうが！。

ラウラ。では切つて仕舞つたらよろしいでせう！。——ネイトは此所で何を致してをりまし
た？。

大尉。夫は俺の職務上の秘密だ！。

ラウラ。然かも豪所中に知れ互つてゐる！。

大尉。可しい、では御前も知つてゐる筈だ！。

ラウラ。私も存じて居ります。

大尉。夫で御前の判決は最早出来上がつてゐるのか。

ラウラ。夫はちやんと法律に書いてございませう。

大尉。法律には書いてない、誰が其子供の父であるかといふ事は。

ラウラ。そりやありません、然しそんな事は分るのが普通です。

大尉。利巧な人達は、さういふ事は決して分るものではないと、主張するんだ。

ラウラ。夫は訝しうございませうね！。誰が子供の父なのか、分るものではないのだから、ございま
すか。

大尉。分らない、と主張するのだ！。

ラウラ。夫は訝しうございませうね！。そんなら何うして父は妻の子に對して、夫程の權利を
持つ事が出来るのだから、ございませうか？。

大尉。父は、自ら進んで義務を背負ひ又は人から背負はされる場合に限つて、其權利を持つ事になる。夫に夫婦関係の場合では父である事に對する疑ひなぞ決して這入り込む餘地はない。

ラウラ。夫婦關係には其疑ひは決して這入り込む餘地はないのでせうか。

大尉。俺はない事を希望する！

ラウラ。でも若し妻が不貞だつたとしたら？

大尉。さういふ場合は此所では問題にならない。外にまだ何か用があるのか。

ラウラ。いゝえ！

大尉。夫ちや俺は書齋へ上がつて来る。ドクトルが見えたら、一寸知らせて呉れないか。(書卓を閉ぢて立上がる)

ラウラ。承知しました。

大尉。(右手のタベストリ貼りの扉を這入つて行く)ドクトルが來たら直ぐだよ、失禮はしたくないから。可いかい。(去る)

ラウラ。え、よござんす。

第五節

ラウラ一人、手に持つた紙幣を眺めてゐる。

繼母の聲。(左手の部屋の中から) ラウラ！

ラウラ。何でございます！

繼母の聲。御茶はもう出來たかい。

ラウラ。(左手の部屋へ行く扉口で) もう直ぐ出來ますよ！

ラウラ。(從卒が開けて「ドクトル・エステルマルクさんでございます」と取次ぐと、すぐ正面奥の扉の處へ行く)

ドクトル。奥様！

ラウラ。(ドクトルの方へ歩み寄つて手を差し出す) ドクトルさん、よく入らつしやいまし

た。よく入らつて下さいました。大尉は出かけましてございませうが、然しもう直き歸つて参ります。

ドクトル。こんなに遅く伺ひまして申譯もございませうが、實はもう二三軒廻つて参りましたので。

ラウラ。さあ、御掛けなすつて！。さあ！

ドクトル。どうも難有うございませう！

ラウラ。まつたく、此界限は唯今は病人だらけの様でございませうが、でも、どうかまあ貴方の御氣に召すやうにと祈つて居ります。こんな田舎で不自由に暮して居りますと、何よりも、患者の面倒をよく見て下さる御醫者様に来て頂くのが、私共には大變難有いのでございませう。夫に、ドクトルさん、貴方の御評判は兼々承つて居ります、私共の方では、どうか近しく御交際が願ひ

たいと存じて居ります次第でございます。

ドクトル。奥様、どうも痛み入ります。然し、私の御宅へ伺ふ事が度々必要にならない様に、私は貴女の爲に希望いたします。御宅では皆さんが是といふ御病氣の方もなし夫に

ラウラ。え、夫は判然からといふ病氣はまあ御蔭様でございますませんが、でも萬事がさうさう順當には参りませんので。

ドクトル。参りませんか？

ラウラ。悲しい事には、何事も此方で願つてゐる様には都合よく参らないものでございます。

ドクトル。え！ 貴女は氣味の悪い事を仰やいますね！

ラウラ。一家の内には色々な事情がございます、名譽のためにも良心のためにも世間の人全體に包み隠して置かなければならないといふ様な……

ドクトル。醫者丈は別として。

ラウラ。ですから、初めて御目にかゝる早々から打ち明けた處をすつかり申上げるのが、私の辛い義務なのでございます。

ドクトル。其御話は大尉さんに御目にかゝる迄延ばして頂く譯には行きませんでせうか。

ラウラ。いゝえ！ 主人に御會ひになる前に、先づ御耳に入れて置きたいのでございます。

ドクトル。夫ぢや御主人の事なんですか。

ラウラ。彼の事でございます。私の愛する氣の毒な主人の事でございます。

ドクトル。奥さん、私は心配になり出しました、私はまつたく貴女の御不幸に同情いたしま

す！

ラウラ。(ハンケチを取り出す) 主人は氣が狂つてゐるのです。是で貴方は一切を御存知になつたのです、あとは貴方御自身の判断に御委せいたします。

ドクトル。貴女は何を仰しやるんです？ 私には迄大尉の鑑物學に關する名論文を一つ／＼敬服して拜見して來ました、さうして何日でも其論文の中から明晰な堅實な知力を讀みとつてゐるのです。

ラウラ。さうでせうか。若し私共が、彼の家族の者共が、みんな間違つてゐるのでしたら、私は嬉しいのでございますか。

ドクトル。もつとも、御主人の精神生活が外の方面では狂つてゐるといふ事も、ないとは限りません。話して聞かせて下さい！

ラウラ。夫なのでございますよ。私共の心配致して居りますのは！。そりや貴方、どうかすると丸で飛んでもない事を考へるのでございますよ。夫はね、學者として自分一人丈で考へてゐる分は構ひませんけれども、何しろ一家を立て、行く大變な障りになるのでございますから。例へば彼には何でも手當り次第買ひ込む病氣があります。

ドクトル。夫りや不可ない、ですが何んなものを御買ひになるんです？

ラウラ。讀みもしない本を、本箱一杯も

ドクトル。學者が本を買ふといふ事は、何も夫程心配な事ではありません。

ラウラ。貴方は私の申し上げる事を御信じにならないのでございますか。

フが参りました……

第六節

ドクトル。大尉タベストリ貼りの扉から這入つて来る。

大尉。あ、ドクトルさん、貴方もう入らしてたんですか！。よく入らして下さいました！。

ドクトル。大尉さん！。貴方の様な有名な學者の方に御目にかゝる事の出来るのを、私は非常に愉快に思ひます。

大尉。いや、何ういたしました。何しろ私の勤務がもつと立ち入つた研究を許さないものから、然し夫でも何うにかある発見の緒口が目つかつたやうなんです。

ドクトル。さうですか！。

大尉。まあ聞いて下さい、私は隕石をスペクトル分析にかけたのです。さうして私は炭素を発見したのです、有機體の痕跡を！。何うですか？。

ドクトル。夫を貴方は顯微鏡で御覧になれるのですか。

大尉。そんな、馬鹿な。分光鏡ですよ。

ドクトル。分光鏡で！。御免下さい！。夫ぢや貴方は、木星の世界で何んな事があつてゐるかといふ事を、今にも私達に云つて聞かせて下さる事が出来る譯ですね。

大尉。何んな事があつてゐるかぢやない、何んな事があつたかなんです。唯巴里のあの本屋の碌でなしめが早く本を送つて寄越せば可いのに、何んだか世界中の本屋が皆んな私に對してストライキをしてゐる様な氣がしますよ。二月この方註文をしても催促狀を出しても猛烈な電報を打つても、返事一つ寄越さないんですからね。疝癢が起きて仕様がな、何うしてこんなのか、丸で譯が分からないんです。

ドクトル。なに、夫りや屹度例の無精なんですよ、そんなに腹を御立てにならない方が可い。

大尉。然し畜生、私は論文を間に合ふ様に纏める事が出来ない、伯林でも同じ問題を研究してゐるんですからね。然しもうこんな話は止ませう！。貴方の話をしなけりや。若し貴方が宅でよろしいのでしたら、離れに小さな部屋が一つあるのですが、夫とも貴方は古くからの官舎へ御越しになりますか。

ドクトル。何方でも貴方の可しい様に！。

大尉。いや、貴方の可しい様に！。仰つて下さい！。

ドクトル。夫は、大尉さん、貴方が定めて下さらなくつちやあ！。

大尉。いや、私は決して定めない。貴方が御好きな通りを仰しやるが可しい。私には何んにも要求はない。全然何んにも！。

ドクトル。いえ、でも私は定める事が出来ないのです……

大尉。何うしたんです、貴方、貴方の好きな通りを返事をなさい。此場合私は何等の意志も意見も欲望も持つてゐないんです！。貴方はそんな愚圖なんですか、自分の好き嫌ひが自分に分

からない様な。返事をなさい、でない怒りますよ！。

ドクトル。勝手を申して宜しければ、私は御宅にゐたいのです！。

大尉。可しい！。難有う！。——あゝ！。——ドクトルさん、御免なさい、然し何が不愉快だつて、どうでも可いといふ様な云ひ草を人から聞かされる程、私には不愉快な事はない。（呼鈴を鳴らす）

乳母。（這入つて来る）

大尉。さうか、マルグレット、御前だね。御前は知らないか、ドクトルに御貸しする離れが片づいてゐるか何うか。

乳母。はい、旦那様、片づいて居ります。

大尉。さうか！。では、ドクトルさん、此上御引き止めはしますまい、貴方も御疲れなんでせう。御機嫌好う又明日、御目にかゝりませう。

ドクトル。大尉さん、お寝みなさい！。

大尉。夫から妻が多少は事情を御話し申し上げた事と思ひますが、此所いらの様子は大概御分りになりましたでせう？。

ドクトル。奥様は御親切に、勝手を知らない者に必要のありさうな事を、色々教へて下さいました。大尉さん、御寝みなさい。

第七節

大尉、乳母。

大尉。何か用か。何うかしたのか。

乳母。もし、アドルフ様、御聞き。

大尉。なんだ、マルグレット。話すがいゝ、俺が疝癢を起さずに聞いてゐられるのは、御前一人つきりだ。

乳母。もしアドルフ様、御嬢様の事でございますが、貴方も少しは折れて出て奥様と話し合ひを御付けになる譯には参りませうでございませうか。まあ考へて御覽なさいまし、母は……

大尉。マルグレット、考へて御覽、父は！。

乳母。父は自分の子よりもつと外のものを持つて居ります、然し母は自分の子つきり持つてゐないのでございます。

大尉。其所だよ、婆や。母は重荷を一つきり背負つてゐない、俺は三つ背負つてゐる、然かも其母の分迄も背負つてゐる。俺に妻と子とさへなかつたら、俺は軍人の古手杯といふのとは丸で違つた地位にゐられた體なんだよ、御前さうは思はないのか。

乳母。さういふ事を申し上げようと思つたのではございせん！。

大尉 いや、俺はさうだと思ふ、御前は俺に間違つた事をさせようとしてゐるんぢやないか。
乳母 アドルフ様、私は貴方の御爲を思つてゐるのだといふ事を、御信しにならないのでございませうか。

大尉 夫はね、俺も信じてゐる、然し御前は、何が俺の爲めになるのか、夫を知らない。俺はね、あの子に生命を與へた丈では物足りない、俺はあの子に自分の靈魂も與へたいのだ。

乳母 え、なんでございませうか能く分かりませんでございませうか。でも、とにかく話し合ひを御付けにならなければ不可ないと、私は思ひます。

大尉 マルグレット、御前は俺の味方ぢやない！

乳母 私が？。あゝ神様、アドルフ様は何といふ事を仰やいますのでございませう。貴方の御小さい時分には、私は貴方を自分の子の様に思つて居りました、夫を私が忘れられると貴方は御思ひになりますか。

大尉 俺が夫を忘れたと云ふのかい。御前は俺にとつて丁度母の様だつた、今迄、凡ての人が俺の敵になつても、御前は俺の味方になつてゐて呉れた、然し今、一番大事な時になつて、今御前は俺を棄て、仕舞ふ、さうして敵方へ移つて行く！

乳母 敵方へ？

大尉 さうだ、敵方へ！。此所の家の中が何うなつてゐるか、御前は知つてゐる筈だ、御前は、始めから仕舞ひ迄、何もかも見て來てゐる。

乳母 私はちやんと見て參りました！。あゝ然し、二人の方が互に命懸けで苦しめ合つてゐ

るといふ事は、全體何うした事でございませう、外には申し分のない他人には親切な二人の方が、未だに一度だつて奥様はこんなだつた事はございませう、私にも又外の人にも……

大尉 俺に丈なんだ、夫は俺も知つてゐる。然しマルグレット、御前に云つて置く、今御前が俺を棄てれば、御前は罪惡を犯す事になるのだよ。今此所の家では俺に對して奸計が巧まられてゐるのだから、夫にあのドクトルも俺の味方ぢやない！

乳母 あゝアドルフ様、貴方は誰れも彼れも悪者だと思つて御仕舞ひになります、ですが是は、貴方が本當の信仰を持つて御出でにならないからでございませうよ！。え、ほんとにさうでございませうよ。

大尉 處が御前とバプティスト共とは、御前達はたつた一つの正しい信仰を目つけてゐると云ふんだらう。御前は仕合せだよ！

乳母 え、く、アドルフ様、貴方の様に不仕合せでは私はございませう！。貴方の心を柔しくして御覽なさいまし、隣人を愛する事によつて神様は貴方を仕合せにして下さいます。

大尉 不思議だね、御前が神の事愛の事を云ひ出すと、御前の聲は残忍になり御前の眼には憎みが溢れる。いや、マルグレット、御前は決して本當の信仰を持つてゐない。

乳母 では貴方は何日迄も御自分の學問を鼻にかけて御出なさいまし、大事な時になると、夫は格別の役には立ちませんよ。

大尉 いやに高慢ちきな事を云ふね、奴隷根性の癖に！。夫は俺もよく知つてゐる、貴様達の様な獸を相手にしてゐちや、何んな知識だつて役には立たない！

乳母。 そんな事を仰しやつて恥かしいとは御思ひになりませんか！。でも婆やは、なんといつても、大きな大きな自分の坊やを一番大事に思つて居ります。嵐が通りすぎたから、あの子はもう大人になつて歸つて来るでせう。

大尉。 マルグレット！。許して呉れ、然し信じて呉れ、御前の外には俺の爲めを思つて呉れるものは此所では誰もゐないのだよ。頼りになつてくれ、何事か起りさうな氣がして仕様がな。

夫が何んだかは俺には分からない、然し今起りさうになつてゐる事は、良い事ではない。

(左手の居間から叫び聲がする)。

大尉。 ありや何だ。誰が聲を立てた。

第八節

前節の人々。ベルタ左手の居間から這入つて来る。

ベルタ。 父様、父様、どうかして！。助けて！。

大尉。 何うしたんだ、御前！。御云ひ！。

ベルタ。 何うかして！。非道い目に遭はされさうだから！。

大尉。 誰が御前を非道い目に遭はせるのだ！。御云ひ！。御云ひ！。

ベルタ。 御祖母様が！。でも私が悪かつたの、御祖母様を騙したんだから！。

大尉。 話すが可い！。

ベルタ。 え、でも云つちや厭よ！。ね、御願ひだから！。

大尉。 まあ話すが可い、どうしたんだ！。(乳母去る)

ベルタ。 え、！。御祖母様はね。毎晩ラムプを暗くしといてから、私にペンを持たせて、卓の上の紙の傍へ私を掛けさせるのよ。夫から御祖母様がさう仰やるの、是から精靈が字を書くのだつて。

大尉。 何んだつて！。然かも夫を御前は一口も俺に云はなかつたぢやないか。

ベルタ。 御免なさい、でも云ふと怖いんですもの、他人に云ふと精靈が仇をするつて御祖母様が仰やつたんだから。夫からね、ペンが字を書くのよ、でも夫を書くのは私だか何んだか、私には分からないの。何うかするとすらく書ける時もあるし、さうかともふと一寸も書けない時もあるの。草疲れて来ると、一寸も書けないだけども、でも何うしても書かなければ不可ないんですつて。今夜は私書くと思つてゐたのに、でも御祖母様はさう仰しやるのよ。こりやシタグネリウスの中にあるんだつて、だから私が御祖母様を騙したんだつて。だから御祖母様は夫りや御怒りになつたの。

大尉。 御前は精靈があるといふ事を信じてゐるのか。

ベルタ。 私知らないわ！。

大尉。 然し俺は知つてゐる、精靈なんてありやしない！。

ベルタ。 でも御祖母様は仰しやつてよ、父様には分からないんだつて、其辨父様は星の世界

が見えるなんて云つてゐるんだから、もつと／＼不可ない事をしてゐるんですつて。

大尉。 そんな事を云つてゐるのか！。 そんな事を！。 夫からもつと何か云つてゐるのか？。

ベルタ。 夫から、貴方に魔法が使へるものかつて！。

大尉。 そんな事俺も主張した事はない。 御前は知つてゐるだらう、隕石といふものは何んなものかといふ事は！。 さうだ、石だ、外の天體から落ちて來た石なんだ。 夫を俺は檢べて、此石が我々の地球と同じ物質を含んでゐるといふ事を、云ふ事が出来る。 俺が見る事の出来るのは、夫丈なんだ。

ベルタ。 でも御祖母様は仰しやつてよ、御祖母様には見られるけれども、貴方には見られな

いものが色々あるんですつて。

大尉。 そりや御前、御祖母さんが嘘をついてゐるんだよ！。

ベルタ。 御祖母様は嘘つきぢやないわ！。

大尉。 どうして？。

ベルタ。 さうすると母様も嘘つきになるから！。

大尉。 ふむ！。

ベルタ。 母様が嘘つきだなんて仰しやるやうだつたら、私もう是から貴方の仰しやる事を本

當にしやしない！。

大尉。 俺はそんな事を云つた事はない、だから御前は俺の云ふ事を本當にしなくては不可ない、御前はね、御前の幸福の爲めに御前の未來の爲めに此家を出て行く必要がある！。 御前行く

かい。 シトツクホルムへ行つて爲めになる事を勉強するかい。

ベルタ。 あゝほんとに私行きたいわ、シトツクホルムでなくつても何所でも可い、此所でさへなけりや！。 唯御父様に時々、始終御目にかゝれさへすれば。 ほんとにあの部屋の中は陰氣で氣味が悪くつて何んだか冬の夜の様な氣がするの、でも御父様が入らつしやると、丁度春の朝窓の二重を外す様な心持になるわ！。

大尉。 俺の可愛い大事なベルタ！

ベルタ。 でも、父様、母様を大事にして御上げなさいな、ね！。 母様はよく泣いていらしつてよ！。

大尉。 ふむ！。 —ぢや御前シトツクホルムへ行く氣なんだね。

ベルタ。 えゝ行くわ！。 行くわ！。

大尉。 でも若し母様が不可ないと云つたら。

ベルタ。 だつて不可ないなんて仰しやる筈がないわ！。

大尉。 でも若し不可ないと云つたら。

ベルタ。 えゝ、さうすりや何うして可いか、私には分らない！。 でも不可ないなんて仰しやる筈がないわ、仰しやる筈がないわ！。

大尉。 御祖母様に頼むかい。

ベルタ。 御父様がよろしく頼んで下さらなけりや、御母様は私の云ふ事なんぞ聽いては下さらないんですもの。

大尉。ふむ！——御前も行きたいと云ふ、俺も行くが可いと云ふ、夫に御母様が不可ないと云ふとしたら、其時はどうすれば可いか？

ベルタ。あゝ、さうすると又喧嘩になるわ！。何うして御父様と御母様とは……

第九節

前節の人々。ラウラ。

ラウラ。さう、ベルタは此所に居るのでございますね！。では私達は此子の意見を訊く事に致さうではございせんか、此子の運命を何方かにきめる事なんぞでございますから。

大尉。若い娘の生活が何ういふ風に形成くられべきであるかといふ事に就いて、子供に根據のある意見のありやうはない、然し俺達には凡その見當がつく、多くの若い娘の生活が何ういふ風に發展したかを見て來てゐるのだから。

ラウラ。でも私達は意見が合はなから、ベルタが夫を決めるが可しいと思ひます。

大尉。不可ない！。俺は、女だらうが子供だらうが、何人にも俺の權利を犯す事を許さない。

ベルタ、あつちへ行つて御出で！。

ベルタ。(躊躇する)

大尉。ね、御出でなさい！。

ラウラ。(ベルタを凝と視る、ベルタは素き止められて立ち止る) で、御前はお出で行きたいのですか、夫とも家にゐたいのですか？。

ベルタ。私分らないわ……

ラウラ。いゝかい、ベルタ、御前の意志で此方の事を何うするといふのぢやないのだよ、但

一應は御前の意志を訊いて置く必要があります。

ベルタ。本當を云ふと……

大尉。(ベルタの腕の處を掴まへて、柔しく左手の扉の處へ連れて行く)

ラウラ。貴方はあの子の發言を恐れていらつしやる、私の註文に符と思つていらつしやるから。

大尉。俺は、あの子自身此家を去りたいと思つてゐる事を知つてゐる、然かも俺は、御前があの子の意志を思ひの儘に變へる力を持つてゐる事も、知つてゐる。

ラウラ。へえ、私はそんなに強いのでせうか！。

大尉。さうだ、御前は自分の意志を押し通す惡魔的の力を持つてゐる、然し夫は如何なる手段を採る事も辭しない人が何日でも持つてゐる力なのだ。例へば、御前は何ういふ風にしてドクトル・ノルリンクを追ひ退けて新ドクトルを連れて來た？。

ラウラ。えゝ、何ういふ風にして夫を仕送けたのでございませう？。

大尉。御前は先の男を、出て行かなければならぬ程、悪く口を云つた、夫から御前は今度の男の爲めに御前の兄に運動させた。

ラウラ。だつて夫りや極々當り前の事で、法律上何所にも難はないぢやありませんか。夫で、ベルタは立つんですか。

大尉。立つ、二週間内に立たせる。

ラウラ。夫が貴方の御決心なのでございますか。

大尉。さうだ！

ラウラ。其事を貴方はベルタに御話しになつたんでございますか。

大尉。さうだ！

ラウラ。夫では私夫を堰き止めて見ても可しうございませうね！

大尉。夫は御前には出来ない！

ラウラ。出来ないんですつて！。自分の子供を下等な人間の中に出して、自分が子供に刻み込んだ事は何もかも皆んな馬鹿げた事だ杯といふ事を覚えさせる、母がそんな事を許すものと貴方は思つていらつしやるんですか。そんな事をさせたら、母は生涯自分の娘から馬鹿にされてゐなけりやなりません！

大尉。御前は父が許して置くと思つてゐるのか、無知な無教育な女共が娘に御前の父は法螺吹きだなぞと云つて聞かせると云ふ事を。

ラウラ。そんな事は父にとつて大して問題にはならないだらうと思ひます。

大尉。どうして。

ラウラ。母の方が子供には餘計關係が密接なんですから、誰が子供の父であるかは事實上誰

にも分るものではないといふ事が發見されてからは。

大尉。夫が此場合に何う應用が利く？

ラウラ。貴方は、御自分がベルタの父であるか何うか、御存知ない事になります！

大尉。夫を俺が知らない！

ラウラ。え、誰にでも分かるものでない事は、貴方にだつて御分かりにならない！

大尉。俺を調戲ふのか。

ラウラ。いえ、私は貴方の理論を應用してゐる丈です。然し、私が貴方に不貞でなかつたといふ事を、貴方は何うして御存知でございます？

大尉。俺は御前を随分信用してゐる、が、夫は云はなくても可い、若し夫が本當だとしたら、御前は夫を云ふ譯がない。

ラウラ。若し、自分の子さへ手離さずにゐて夫を自分の思ひの儘にする事が出来るものなら、何んな事でも、突き落されても蹂みつけられても、何んな事でもするといふ氣に、若し私になつたとしたら、さうして包み隠しをせず、ベルタは私の子です然し貴方の子ではないと、打ち明けるとしたら！。若し……

大尉。止してくれ！

ラウラ。唯假定するのです、さうすれば貴方の力は碎かれて仕舞ひます！

大尉。俺が父でないといふ事が、御前がちゃんと證明すれば！

ラウラ。夫は別に六づかしい事でもございませうまい！。證明しろと仰しやるのですか。

大尉。止してくれ！

ラウラ。無論、私は本當の父の名前を申し上げて、場所と時とを判然させさへすれば、夫でよろしいのです——例へば、何日ベルタは生れたか？——結婚後三年目に……

大尉。止せ！止さなけりや……

ラウラ。止さなけりや、何んでございます？まあ止ませうね！然し、貴方は、御自分で何をなさり何を御定めになるのかを、よく御考へなさい！そして皆んなの嘲笑ものにならない様に氣を御付けなさい！

大尉。俺は是等凡ての事を非常に悲しい事だと思ふ！

ラウラ。夫丈貴方はみつともないんです！

大尉。處が御前はさうぢやない！

ラウラ。え、夫程慥巧に巧らんで置いたのです。

大尉。だから御前達と喧嘩は出来ない。

ラウラ。何うして貴方は又一枚上の敵と喧嘩をしようとなさるんです？

大尉。一枚上の？

ラウラ。さうですとも！かういふと可笑しいやうですが、私は今だに一度だつて、自分の方が一枚上だと思はずに、男の人を見た事はありません。

大尉。夫ぢや今に偉い奴を見せてやる、二度と再び忘れられない様な。

ラウラ。楽しみにして居りませうよ！

乳母。(登場) 御飯の御支度が出来ました。どうぞ入らしつて召し上がつて下さいませんか。

ラウラ。え、行つてよ！

大尉。(躊躇する、ソファ卓の傍の椅子に腰を下ろす)

ラウラ。貴方夕御飯を召し上らないんですか。

大尉。いや、何んにも食ひたくない！

ラウラ。え？貴方怒つていらつしやるの？

大尉。いや、然し俺は腹が減らない。

ラウラ。入らつしやい、でないと色ろんな事を訊くから——餘計な事を！——機嫌を御直しなさいな！——御厭なら、さうして入らつしやい！(去る)

乳母。アドルフ様！何うなさつたのでございます？

大尉。俺には分からない。何うすりや御前達は年とつた男を子供の様に扱ふ事が出来るのか、御前云つて聞かせてくれないか。

乳母。私にもよくは分かりませんが、然し何んぢやございませんでせうか、男はみんな女の子だからぢやございませんでせうか、偉くつても偉くなくつても……

大尉。然かも男から生れた女はない。然し何んと云つても俺はベルタの父なんだ。おい、マルグレット、御前は夫を信じないか。御前は夫を信じないか。

乳母。まあ、何うしてそんな子供の様な事を。貴方は御自分の御子供の御父様に相違ございませぬ。さ御飯を食べに参りませう、こんな所にゐて膨れていらつしやるものぢやございませぬ

！。さあ入らつしやいまし！。

大尉。(立ち上がる) 行つちまへ、阿魔！。くたばつちまやがれ！。(玄關へ出る扉口で) スフェルト！。スフェルト！。

從卒。(這入つて来る) 御呼びでございますか。

大尉。櫛の支度をさせろ、大急ぎだぞ！。

乳母。大尉様！。どうか聞いて下さいまし……

大尉。行つちまへ、阿魔！。早く行け！。

乳母。あゝ神様、何うなる事でございますやう？。

大尉。(帽子を被つて外出の支度をする) 夜半迄は歸らないぞ！。(去る)

乳母。神様御助け下さいまし、何うなる事でございますやう？。

第二幕

前幕と同じ舞臺装置。

卓の上にラムプが點つてゐる。夜。

第一節

ドクトル、ラウラ。

ドクトル。大尉と御話をして見たのですが、御病氣だといふ證據を、私は少しも擧げる事が出来ませんでした。第一、大尉が顯微鏡を覗いて外の天體に關する驚くべき結論に到達なさつたのだと、貴女の御話でございましたが、あれは間違ひです。夫が分光鏡だと伺つて見ると、狂氣の疑念を挟む餘地なぞなくなつて仕舞ふ計りでなく、夫處か御主人は、科學に對して立派な貢獻をなさつた事になると思ひます。

ラウラ。でも私だつてそんな事を申し上げた事はないぢやございませんか。

ドクトル。奥さん、私は貴女との御話を書きとめてゐるのですよ。夫に、若しや聞き違へたのかも知れないとも思つたから、要所を貴女に聞き返しさへした事を、私は記憶してゐます。か

ういふ訴へをなさる場合には誠實であつて下さらなくつては、何しろ一人の男子に禁治産の宣告をするがしないかと云ふ場合ですからね。

ラウラ。 禁治産を宣告するんですつて。

ドクトル。 さうです、御承知の事と思ひますが、發狂者は其公民權をも家族權をも失つて仕舞ふのです。

ラウラ。 いゝえ、私そんな事は存じませんでした。

ドクトル。 第二に、私に妙に思はれる點が一つある。御主人は、幾ら本屋に手紙を出しても返事が来ないと、云つて御出で、ございました。若しや貴女は見當違ひな御心遣ひからさういふ手紙を押さへて御出でになるのではないでせうね。

ラウラ。 えゝ、押へてゐます！。然し家の利害の爲に心を遣ふのは私の義務なのです、主人に勝手をさせて置く譯には参りません、さうしなければ彼は私達皆んなの者を破滅させて仕舞ひます。

ドクトル。 失禮ですが、何うも貴女には、さういふ仕打の結果が、まだよく分つて御出でない様な氣がします。御主人の一舉一動に貴女が隠れて干渉して御出での事が、若し知れでもすると、御主人の嫌疑には證據が出来ることになり、さうすれば其嫌疑は雪崩の様になります。さうして御主人の疴癢を極度に刺激なさつた事になります。自分の一番熱烈な欲望に邪魔を入れられたり、自分の意志が壓迫されたりする時には、其爲我々の靈魂が何んなに摺り減らされるか、

是は貴女にだつて屹度覺えが御ありの事でございます。

ラウラ。 覺えがあるだらうですつて！。

ドクトル。 さ、夫ぢや、御主人が何んな氣がして御出でだか、貴女にも分かる譯です。

ラウラ。 (立ち上る) もう夜中ですわ、夫なのにまだ歸つて来ない。何だか變事がありさうな氣がします。

ドクトル。 ですが、奥さん、一體、今夜私が此所にゐなくなつてから、何んな事があつたんですか。何もかも是非伺はせて下さい。

ラウラ。 譚話を云つたんです、随分妙な事を云ひました。まあ貴方、俺は俺の子の父ぢやないなんて、そんな飛んでもない事を云ふんでございますよ。

ドクトル。 夫りや訝しい。何うして又そんな事を御考へになるやうになつたんです？。

ラウラ。 私には分かりません。子供を引き取る引き取らないで、主人が從卒の一人を詰問致したのでございますが、其時私が女の方の肩を持ちますと、主人は躍起になつて、自分の子の父が誰であるかは何んな人にだつて分かるものではない、と云ひ出したのでございます。私、氣を静めさせようと思つて、何んなに骨を折つたか知れませんが、でも、もう何うすることも出来ない様な氣がします。(泣く)

ドクトル。 然し此儘打ち遣つて置いては不可ない、兎に角御主人の嫌疑を惹き起こさないやうに氣をつけて、何とか手段を講ずる必要があります。なんですか、大尉は前にもそんな妄想を御起しになつたことがありますか。

ラウラ。六年前にも丁度同じ様な事がございました、其時は主人は自分で、然かも醫者に宛てた自筆の手紙の中で、氣が狂ひはしないかと怖れてゐると、白狀してゐます。

ドクトル。あ、さうですか、さうですか、是は深い根のある話なんです。然し家族生活の神聖其他に對して——私は夫を根掘り葉掘り伺ふ事は致しませう、私は、自分の見てゐる事丈に、捕まつてゐる事にしませう。一度あつた事は、残念ながら、元に還す譯には行かない、兎に角其あつた事に對して療治を加へなければならぬでせう。——何所に、御主人は今御居でだと、御思ひになりますか。

ラウラ。私には見當もつかないのでございます。でも今ぢや丸で滅茶苦茶になつてゐるんですから。

ドクトル。貴女は、私が御歸り迄御待ちしてゐた方が可いと御思ひになりますか。もつとも嫌疑を避ける爲めに、御隠居さんの御加減が悪かつたから、夫で御見舞に參つたといふ事に致して置いて可しいのですが。

ラウラ。え、夫りや大變結構でございます！。ドクトルさん、どうぞ私共を見棄ないで下さい、私本當に心配なんでございますから。ですが、主人の状態に就いて御考へになつて御出での事を、貴方から打ちつけに主人に仰しやつて下さつた方が、却つて可しくはないでせうか？。

ドクトル。そんな事は精神病患者には決して云ふべき事ではありません、患者が自分で夫を云ひ出す迄は、然かもさういふ時でさへ云ふのはほんの例外です。夫は、事態が何ういふ工合に移つて行くか、其工合一つで定まる事なんです。然し夫にしても私達は此所にかうしてゐては不

可ない、私は隣りの部屋に入れて頂きませうか、其方が不自然に見えなくてすむから。

ラウラ。え、夫が可しうございます、夫から此所にはマルグレットを坐らせて置きませう。主人が外出してゐる時は、何日でもあの女が起きてゐるので、夫に主人に對して幾らかでも力を持つてゐるのは、あの女一人つきりなんでございますから。（扉口へ行く）マルグレット！。マルグレット！。

乳母。御呼びでございますか。——旦那様は御歸りになりましたでございますか。

ラウラ。いゝえ、でも御前此處に坐つてゐて御待ちしてゐて御呉れ、御歸りになつたらね、さう云ふんだよ、母が病氣だから、夫でドクトルが入らしつてゐるんだつて。

乳母。畏りました、氣を注げて、萬事都合の可いやりに致しませう。

ラウラ。（左手の部屋への扉を開ける）ドクトルさん、どうぞ御這入り下さいまし！。ドクトル。難有うございます！。

第二節

乳母。（卓に凭つて掛ける、聖歌集と眼鏡とを取り出す）さうだ、さうだ！。さうだ、さうだ！。（半音で讀む）

『あゝ苦み多く歡び少なく
人の世は夢の間に過ぎ行く。』

死の御使ひは空翔け廻りて
聲高に世の人に告ぐ——

おゝ浮きたる心よ恒なきものよ」

さうだ、さうだ！。さうだ、さうだ！。

「さなり、地上に生きとし生けるものは、

御使の劔に倒る。

悲みのみぞ獨り生きて

同じ言葉を墓銘に撰む——

おゝ浮きたる心よ恒なきものよ」

さうだ、さうだ！。

ベルタ。 珈琲沸しと刺繡枠とを持って這入つて来る、小聲で話をする。 マルグレット、御前

の傍に掛けても可い？。あすこの部屋は夫りや氣味が悪いのよ！。

乳母。 おやく！。ベルタ様はまだ起きていらつしやるんですか。

ベルタ。 私父様に上げるクリスマス・プレゼントを縫つてるのよ、ね、ほら。夫から此所に

御前に好いものを持つて来て上げてよ！。

乳母。 えゝでも、御嬢様、不可ませんよ！。明日は早く御起きになるのぢやございせんか、

もう十二時を過ぎて居ります。

ベルタ。 だつて仕様がないわ！。私あの上に一人でゐるのは、怖い、御化が出るやうだか

ら。

乳母。 ほうら、云はない事ぢやございせん！。まつたく、私の云ふ事に嘘ぢやございせん

まい、此屋敷が悪いのですよ。夫で貴女は何を御聞きになつたの？。

ベルタ。 あゝ、あのね、誰か屋根裏で歌を唄つてゐるの。

乳母。 屋根裏で、こんな時刻に？。

ベルタ。 えゝ、夫がねえ、今迄聴いた事もない様な、そりやあ悲しい／＼歌なのよ。夫が屋

根裏から聞こえるらしく響けるの、あの搖籃の置いてある、ほら、左側に……

乳母。 おゝ、おゝ、おゝ！。夫に今夜はこんな御天氣だし！。今に屹度烟突が吹き飛ばされ

ますよ。『あゝ此世の生とは何ものぞ——辛酸と苦役と重荷とに外ならず。——たとひいとも復

難き寶といふとも——そは選まれたる勞苦に外ならず』——ね、御嬢様、好いクリスマスが来る

やうに、神様に御願ひいたしませうね！。

ベルタ。 マルグレット、父様は御病氣だつて、ほんと？。

乳母。 えゝ、さうでございせんよ！。

ベルタ。 夫ぢやクリスマス御祝ひも出来ないのね。でも、御病氣だつていふのに、何うし

て起きていらつしやれるの？。

乳母。 夫はね、御父様の御病氣は、起きていらつしやれる御病氣なんです。ちよつと、御玄

關で足音がする様だ。さ、行つて御寝みなさいまし、珈琲沸しを持って、夫でないと旦那様が御

叱りになりますよ。

ベルタ。(盆を持って出て行く) マルグレット!。おやすみ!
乳母。御嬢さま、御やすみなさいまし!

第三節

乳母、大尉。

大尉。(外套を脱ぐ) まだ起きてゐたのか? 寐て仕舞へ!

乳母。まあ、御待ち申して居つたのではございませんか……

大尉。(燈をつける、書卓の揚蓋をあける、其前に坐つて衣囊から手紙新聞などを取り出す)

乳母。アドルフ様!

大尉。何か用か。

乳母。御隠居様が御加減が悪いのでございますよ。ドクトルが御出になりました!

大尉。よつほど悪いのか。

乳母。いゝえ、夫程の事もないやうでございます。ちよつと風邪を御ひきになつたので。

大尉。(立ち上がる) マルグレット、御前の子の父は誰だつた?

乳母。まあ、あんなに御話し致したではございませんか、あのやくざ者のヨハンスゾンでござ

います。

大尉。御前にや確かかい、彼が父だといふ事は?

乳母。何うして又そんな子供らしい事を、確かでございますとも、彼一人だつたんでござい

ますもの。

大尉。さうだね、然し彼には確かだつたのかね、自分一人だと云ふ事が? いや、夫は彼に

は出来なかつた、處が御前には確かなんだ。いゝか、此處に區別がある。

乳母。いゝえ、區別なんかありは致しません。

大尉。いや、御前には夫が分からないんだ、分らなくつても區別はちやんとある!。(卓の上にある寫眞帖をめくる) ベルタは俺に似てゐると、見えるか。(寫眞帖の中の一枚の寫眞を眺める)

乳母。似て御出でゝございますとも、卵と卵を並べた様に!

大尉。ヨハンスゾンは、自分が父だといふ事を、認めてゐたのか。

乳母。そんな、無理にでも認めさせますよ。

大尉。無理にでも? 夫が堪らないんだ!。——あ、ドクトルが!

第四節

大尉、乳母、ドクトル。

大尉。ドクトルさん、今晚は。母は何んなんですか。

ドクトル。なに、大した事ではありません、左足の脱臼です。

大尉。マルグレットは風邪だと云つた様だつたが。病氣が色々に見立てがつくと見える。マルグレット、寐て仕舞へ！。

(乳母去る)

(間)

大尉。ドクトルさん、お掛け下さい。

ドクトル。(掛ける) 難有うございます！。

大尉。縞馬を普通の牝馬にかけると、縞のある子馬が生れると云ひますが、本當ですか。

ドクトル。驚ろいて。本當ですとも！。

大尉。續いて夫に普通の牝馬をかけると、其子馬にも縞があると云ひますが、本當ですか。

ドクトル。ええ、夫も本當です。

大尉。夫ぢや或場合には普通の牝馬が縞のある子馬の父である事もあり得れば、又其逆もあり得る譯ですね？。

ドクトル。ええ！。あり得る事ですね！。

大尉。といふ事は、子が父に似てゐるといふ事は何の證據にもならない、といふ事になります。

ドクトル。おゝ……

大尉。といふ事は、父であるといふ事は證明され得ない、といふ事になります。

ドクトル。おゝ！。大尉さん！。

大尉。貴方は今は御一人だが、御子さんが御ありでせう？。

ドクトル。ええ……

大尉。貴方には父といふ事が滑稽に思はれる時がありはしませんでしたか。私には、自分の子供を連れて往來を散歩してゐる父を見る時程、滑稽に思はれる事はない。第一、自分の子供自分の子供と父がいふのが、私には分らないのです。「自分の妻の子供」といふのが本當でせう。今迄貴方は父といふ地位の見掛倒しに過ぎない事を御感じになつた事はありませんでしたか。今迄貴方は疑惑の爲に心を掻き亂された事はありませんでしたか。嫌疑と迄は取て云はない、私は紳士として、貴方の奥さんが一切の嫌疑から超越していらつしやるといふ事を、認めてゐるのだから。

ドクトル。いや、疑惑の爲に心を掻き亂される様な事は、私には一度もありませんでした。

然し、ねえ、大尉さん、人は誠と信とによつて我子を認めざる可からず、とゲーテだつたか云つてゐます。

大尉。誠と信とによつて、女が問題になるときに？。夫りや危険です！。

ドクトル。そりや、女にも随分色々な種類があります。

大尉。最近の研究が證明する所によると、唯一種類しかないのです！。——若い時分には、私は丈夫なそして——己惚になりますか——綺麗な男でした。其時分の印象で、後では私の不安

を惹き起す種となつた、二つの瞬間の印象を、私は未だに覚えてゐる。一度は汽船で旅をしてゐた時の事です。私達は、私と二三人の友達とは、前甲板の船室に這入つてゐました。私の向ひに若い宿屋の神さんが来て泣く／＼腰を掛けました、聞いて見ると、云ひなづけの男が難船して死んだんだと云ふのです。私達は皆んな同情しました、私はシヤンパンを誂へた。シヤンパンの二杯目がすんで私は其女の足に觸れた、四杯目がすんで其膝に觸れた、夫から夜が明けないうちに私は其女を慰めて仕舞つた。

ドクトル。夫は冬の蠅の類ぢやありませんか！

大尉。其處へ第二のものが参ります、然かも是は夏の蠅だつたんです。私は西海岸の海水浴場にゐました。其所に子供を連れたい若い細君が来てゐました、亭主は市中に残つてゐたんです。其女は宗教的な女で、恐ろしく八釜しい主義を持つてゐて、頻りに私に道徳を説いて、見受ける處、大變堅固な人らしかつた。私は其女に本を一二冊貸してやつた。其女が立つときに、其女は、不思議に、其本を返して寄越した。三月許り經つて私は其本の一つの中から、かなり明らさまな宣言を書いた其女の名刺を發見しました。女は無邪氣だつたんです。所天のある女から送つた戀の宣言が、他所の男にとつて、てんで其女の機嫌を取らうとさへもしなかつた餘所の男にとつて、無邪氣であり得ると同じ様に、あの女は無邪氣だつたんです。其處で此話から教訓が出て来る。信用し過ぎるな！

ドクトル。信用しなさ過ぎてても不可ません！

大尉。さう、信用し過ぎてても信用しなさ過ぎてても！。然しね、ドクトルさん、其女は、私に

逆上せてゐるといふ事を、自分の亭主に云つた程、夫程無意識的に下劣だつたんですよ。女は自分が本能的に下劣である事を意識しない、恰も其處に危険があるので。勿論夫は酌量すべき情状ではある、然し夫は判決を覆す事は出来ない！

ドクトル。大尉さん、貴方の御考へは病的な方向に動いてゐます、氣を御つけにならないと不可ません。

大尉。病的といふ言葉を御使ひになつては不可ない。かういふ事がある、凡ての蒸氣汽罐は氣壓計が百を指すときには爆發する、然し百は凡ての汽罐にとつて同じものぢやない。分かりますか？。夫は兎に角、貴方は私の見張りをする爲に此所にいらつしやる。若し私が男子でなかつたら、敢て貴方に他人を訴へるか、或は狡く名のつけてある様に、自分を訴へる事にしたかも知れない、さうして貴方に私の症候の全部を、猶進んでは病氣の歴史を申し上げる事が出来たかも知れない。然し生憎私は男子です、私は羅馬人の様に腕を胸の上に組んで、死ぬ迄呼吸を殺してゐるより外の事は出来ない。御寝みなさい！

ドクトル。大尉さん！。若し貴方が御病氣でしたら、凡ての事を仰しやつた處で、貴方の男子としての名譽を傷つける事にはなりません。私には片方の言ひ分も聞く義務があります！。

大尉。貴方は一方の云ふ事丈を聞いて満足していらつしやる、やうな氣がします。

ドクトル。違ひます、大尉さん。私はね、アルギング夫人が死んだ亭主の棚下しをするのを聞いて、亭主が死んでゐるといふ事が非常に残念だと思つた位なんです。

大尉。若し亭主が生きてゐたら、屹度何か云ふだらうと、貴方は思つて御出でなんでしょうか。

夫では、貴方は、死んだ所天そつてんの一人が生き戻る事があるとして、其人の云ふ事を信する者がある
と、思つて御出でなんですか。ドクトルさん、御寝みなさい！。御覽の通り、私は落ついてゐる、
安心して御寝み下さい！。

ドクトル。では、大尉さん、御寝みなさい。此事に就いては此先何うして可いか私には分か
らない。

大尉。私達は敵でせうか。

ドクトル。何うしてそんな事が。唯残念なのは、御互に味方になれない事なんです！。御寝
みなさい。(去る)

大尉。(ドクトルを正面奥の扉口迄送る、夫から左手の扉口へ行く、夫を少し明ける) 這入
るが可い、話をするから！。御前が其所に立つて立ち聴きをしてゐるのを、俺は知つてゐた。

第五節

ラウラどきまぎしながら這入つて来る。大尉は書卓の揚蓋の傍に掛ける。

大尉。夜は更けてゐる、然し俺達は話をつけて仕舞はなければならぬ。掛けるが可い！。

(問)

大尉。俺は今夜郵便局へ行つて来た、さうして手紙を取つて来た！。夫で見ると、御前は出

す手紙も来る手紙も一々押さへてみたといふ事が分かる。其結果として第一に、時間の損失の爲
めに俺の研究の豫期されてゐた結論が滅茶滅茶にされてしまつた。

ラウラ。私は好意で夫を致したのです、外の研究の爲めに貴方は御自分の御勤めを疎かにし
ていらつしやるのだから。

大尉。本當は御前夫を好意でしたのではあるまい、俺が俺の勤めの方でよりも是等の外の研
究の方で早晚もつと名譽を得るといふ事を、御前はちやんと知つてゐるのだから！。然かも御前
には、兎に角俺が名譽を得るといふ、其事が何よりも一番氣に入らなかつたのだ、其爲め御前の
無價値は壓迫されるのだから。——夫から俺は、御前に宛てた手紙を押さへて来た。

ラウラ。高尚な御仕打でございますこと。

大尉。まつたく、御前は俺を買ひ被ふつてゐて呉れるね。——是等の手紙を見ると、御前は
俺の精神状態に關する出鱈目な噂をふり播いて、大分前から俺の友達を俺の敵にして仕舞つた事
が分かる。御前は骨を折つた丈の甲斐があつた、俺の上官から俺の料理番に至る迄、俺を正氣だ
と思つてゐるものは、一人だつてゐなくなつてゐるんだから。處で俺の病氣といふのは何んな工
合だといふと、御前の見る通り、俺の頭は亂れてはゐない、俺は俺の勤めも又父としての俺の義
務も結構充たして行ける、俺の感情もまだ幾らかは俺の自由になる、意志が多少でも傷つけ
られないでゐる限りは、然かも御前は其意志を嘔り詰めに嘔り續けてゐる、今にも支への力が抜
けて弾機ばねはち切れるだらう。俺は御前の感情に訴へようとは思はない、御前は感情といふもの
を持つてゐないのだから、其處に御前の強味がある、然し俺は御前の利害に訴へる。

ラウラ。 承りませう。

大尉。 御前は御前の仕向けで、俺の邪推を荒立てる事が出来た、俺の判断は今にも曇り俺の思想は今にも纏れ出すだらう。是こそ御前が待つてゐる氣狂ひの始まりかけなのだ、夫は今にも直ぐ破裂しさうになつてゐる。其處で御前にかういふ問が出て来る、俺が健康であるのとゐないのと、何方に御前は餘計利害を持つてゐるか！。よく考へて見るが可い！。若し俺が氣狂ひになるとする、俺は勤めをなくして仕舞ふ、さうすれば御前達は投げ出される。俺が病死するとする、俺の保険料は御前達の手に入らる。然し俺が自殺をする様な事にでもなつたら、御前達には一文も手に這入らない！。従つて御前は、俺が俺の命數丈生きるといふ事に、深い利害を持つてゐる。

ラウラ。 夫は陥わな罠わななんですか。

大尉。 さうだ、其通りだ！。廻り道をするか首を突つ込むか、夫は御前の勝手だ

ラウラ。 貴方は自殺をすると仰しやる！。そんな事貴方はなさらない！。

大尉。 御前夫が云ひ張れるか。そのために生きようといふ何物も何人も持つてゐない男が、生きてゐられると、御前は思ふか。

ラウラ。 夫ぢや降参なさるんですね？。

大尉。 いや、和陸を申し出すのだ。

ラウラ。 條件は？。

大尉。 俺の理性を取りとめさせて貰ひたい。俺の嫌疑さへ拂つて呉れれば、俺は戦争を止めて仕舞ふ。

ラウラ。 何んな嫌疑を？。

大尉。 ベルタの素性だ！。

ラウラ。 全體其事に何かの嫌疑があるんですか。

大尉。 ある、嫌疑がある、然かも其嫌疑は御前が起させたのだ。

ラウラ。 私が？。

大尉。 さうだ、御前は菲沃斯の雫の様子に夫を俺の耳の中へ滴した、さうして周囲の事情が夫を段々大きなものにした。不確かな事から俺を救ひ出して呉れ、眞つ直に、かうくだと云つてくれ、俺は前以て御前を赦して置く。

ラウラ。 でも私は、自分で犯した事もない罪を、身に被る譯には参りません。

大尉。 何んでもない事ではないか、誰れにも洩らしはしない事は御前にも分かつてゐる。御前は、男が外へ行つて自分の恥を吹聴して歩行くものだと思つてゐるのか。

ラウラ。 若し私が、夫は違ひます、と申し上げたら、貴方は夫を御信じにならない、若し私が、其通りですと、申し上げたら、貴方は夫を御信じになる。ぢや貴方は、夫が本當である事を望んでいらつしやるんですね。

大尉。 夫は變に聞こえもする、然し夫は恐らく、前の場合は證明される事が出来ない、出来るのは後の場合だからだらう。

ラウラ。 一體貴方の嫌疑には根據があるのでございますか。

大尉。 ある——ない！。

ラウラ。貴方は屹度私の罪證を握りたいと思つていらつしやるんです、私を追ひ退けて後で自分一人であの子を自由にしようと思つて。然し私はそんな陥穽には掛りませんよ。

大尉。御前は、俺が御前の罪の確かな事を知つて猶、他人の子を自分の傍に置いておくと、思つてゐるのか。

ラウラ。いゝえ、夫に違ひありません、分つた、貴方は前以つて赦して置くなど云つて、貴方はたつた今嘘を吐いたんです。

大尉。(立ち上がる) ラウラ、俺を救つて呉れ俺の頭を救つて呉れ。御前には、俺の云ふ事が、少しも分かつてゐない。若しあの子が俺の子でなかつたら、俺はあの子に對して何の權利も持つてゐない又持ちたいとも思はない、夫こそ御前の望む處ぢやないか。さうぢやないのか。夫とも御前はずと夫以上を望んでゐるのか。御前はあの子に對しては權力を持ち、然かも俺には御前達を養はせようとするのか。

ラウラ。權力です、えゝさうです。此命懸けの戦さは權力の爲めでなくつて何の爲めの戦さです？

大尉。俺にとつては、來世といふ事を信じない俺にとつては、子供が俺の來世の生活だつた。俺の永遠は俺の子供だつた、同時に又夫は現實的な意味を持つた恐らく唯一つの永遠でゝもある。其永遠を御前が奪ひ去れば、俺の生活は中斷されて仕舞ふ。

ラウラ。何うして私達は好い加減に別れなかつたんでせう？

大尉。子供が俺達を結びつけてゐたからだ、然かも其紐は鎖になつた。何うしてさうなつた

のか。何うして？。俺は今迄夫を考へて見た事もなかつた、然し今記憶が、訴人をする様に寧ろ宣告を下すやうに、浮かび上がつて來る。結婚して二年の間俺達には子供が一人もなかつた、なぜなかつたかは御前が一番よく知つてゐる。俺は病氣になつた、死ぬか生きるかの床についた。ある日熱の退いてゐるときに、俺は隣の客間で人聲がするのを聞いた。夫は御前と辯護士とだつた！。御前達は、其時分にはまだあつた、俺の財産の事を話してゐた。辯護士は御前に、子供が一人もないのだから、御前には一切を相續する事が出來ないのだと説明した、夫から辯護士は御前に、妊娠してゐるか何うかと訊いた。何と御前が返事をしたか、俺は聞いてゐる。俺は癒つた、さうして俺達には子供が生れた。誰が父なんだ？。

ラウラ。貴方です！。

大尉。いや、父は俺ぢやない！。茲處に犯罪が、今發覺しさうになつてゐる犯罪が、葬られてゐる。さうして何といふ恐ろしい犯罪だらう！。黒ん坊の奴隷を解放する丈の慈悲心は御前達は充分に持つてゐる、然かも御前達は白人の奴隷は手離さない。俺は、御前と御前の子と御前の母と御前の召使ひとの爲めに、奴隷の様に働らいて來た、俺は俺の使命も俺の地位も犠牲にした、俺は御前達の生存の爲めに體の苦しみや胸の痛みや眠られぬ夜や心の不安やに堪へて來た、其爲め俺の髪は白くなりかゝつてゐる。何の苦勞もなく御前に生活させるため、老後の月日を御前が子供の生活でもう一度樂み返す事の出來るため、俺は一切の事に堪へて來た。一切の事を不平も云はずに堪へて來た、夫は俺があの子の父だと信じてゐたからなんだ。是は明々白々の竊盜だ、最も忍な奴隷抜ひだ。俺は十七年の間苦役で苦しめられて來た、然かも俺には何の罪もなかつ

「たんだ、其償ひに御前は何を寄越す？」

ラウラ。いよく、貴方は氣が狂つて仕舞つたんです！

大尉。(掛ける) 夫を御前は望んでゐる！。然かも俺は、御前が其犯罪を隠す爲めに、何んなに骨折つて来たかを知つてゐる。俺は御前の苦しみの内容を知らなかつたから、御前に對して同情を持つてゐた、俺は病的な考へが御前を苦しめるものだと思つてゐたから、夫を追ひ拂ふ氣で、御前の良心の呵責を幾度落つけてやつたか分からない、俺は聞く氣もなしに、寐てゐて立てる御前の叫び聲を聞いてゐる。今になつて思ひ當る、一昨日の晩——ベルタの誕生日の晩の事だ。明け方の二時と三時との間だつた、俺は起きて本を讀んでゐた。御前は誰か、締め殺しにでも来たやうに、來ちや不可ない、來ちや不可ない！と聲を上げた。俺は壁を叩いた——俺はもう先きを聞くのが厭だつたから。長い事俺は嫌疑を持つてゐたんだ、唯夫を確める勇氣がなかつたんだ。——是程俺は御前の爲に苦しんで來てゐる、夫に對して御前は俺に何をす？

ラウラ。何を私がする事が出来ませう？。私は、神様の名によつて、あらゆる神聖なものの名によつて、貴方がベルタの父であるといふ事を、誓ひませう。

大尉。夫が何になる、御前は先刻云つたではないか、自分の子の爲めなら母は何んな罪でも犯す事が出来る又犯さなければならぬ。俺は過去の思ひ出に縋つて丁度傷ついた者の様に慈悲の止めを嘆願する、何もかも云つて呉れ。俺が子供の様に途方に暮れてゐるのが御前には分からないのか、俺は母に訴へるやうに御前に訴へてゐるのが御前には聞こえないのか、俺が男であるといふ事俺が軍人であるといふ事俺はたつた一言で人間や動物を押さへる事が出来るといふ事

さういふ事を御前は忘れては呉れないのか。俺は病人の様に唯同情に餓えてゐる、俺は俺の權力の記號を外づして俺の生命に對する慈悲を哀願する。

ラウラ。(大尉に近よつて手を其額の上に置く) おや！。泣いていやつしやる、男が！。

大尉。さうだ、泣いてゐる、男ではあるが。然し男は眼を持つてゐないのか。男は手を、脚を、五官を、好き好きを、情熱を持つてゐないのか、男も女と同じ喰物で生きてはゐないのか、同じ武器で傷つけられはしないのか、夏には熱さを冬には寒さを同じく感じはしないのか。御前達から突き刺されて、俺達は血を出さないのか。御前達から擽ぐられて、俺達は笑はないのか。御前達から毒を盛られて、俺達は死にはしないのか。何故男は哀しんではならないのか。何故軍人は泣いてはならないのか。男らしくないからかといふのか。何故夫が男らしくない。

ラウラ。坊や、御泣きなさい、御母さんがついてゐて上げます。貴方は覺えていらつしやいますか、私は始め第二の御母さんとして貴方の生活の中に這入つて來ました。貴方の大きな頑丈な身體には神經が足りなかつた、だから貴方は大きな子供だつたんです、生れて來る事が早過ぎたのか、夫とも一寸とも欲しいとも思はずに生れて來たのか、何方かの。

大尉。さうだ、夫に違ひない！。父と母とは俺を欲しいとは思はなかつた、だから俺は意志なしに生み落された。夫だから、御前と一緒になつたとき、俺は自分ないものを身につけるのだと信じた、夫だからこそ御前は命令する事を許されたのだ！。兵營で軍隊で命令する者だつた俺は、其俺は御前の前では服従する者だつた、俺は御前にびたりと喰つついて大きくなつた、御前を一段高い處にゐる人間の様に見上げてゐた、丸で頑是のない子供の様に御前に服従してゐた。

ラウラ。さうです、昔は其通りでした、だから私は貴方を子供の様に愛してゐたんです。然し貴方は、貴方にも分かつてゐた事と思ひます、貴方の感情が性を變へて、貴方が戀人として私の前に御立ちになる度毎に、私は何日でも自分に恥ぢました、貴方の抱擁は歡びの後に良心の呵責を残しました、丁度私の中の血が恥辱を感じてもする様に。母が戀人になつたんです、堪らない！

大尉。夫は俺にも氣がついてゐた、然し俺には譯が分らなかつた。俺は、俺の男らしくない事が御前から輕蔑されるのだと思つたから、男らしくなる事で、女としての御前の心を得ようとした。

ラウラ。さうです、然し夫が間違ひなんです、母は貴方の味方です、是は貴方にも分かつてゐる、然し女は貴方の敵ですよ、だから男と女との間の戀は戦争なんです！。私が貴方に身を捧げたなぞと御思ひになると違ひます、私は與へはしない、私は私の欲しいものを取つたんです。然かも貴方は主權を握つていらした、夫が私には堪へられなかつた、だから夫を貴方に思ひ知らせたかつたんです。

大尉。主權は何日でも御前が握つてゐた、御前は覺めてゐる俺に催眠術をかけて、何んにも見せず何んにも聞かせず、唯服従してゐる様にする事が出来た！。御前は泥だらけの馬鈴薯を俺に呉れて、夫を桃だと俺に吹き込む事が出来た！。御前は俺に無理強ひをして、御前の愚かな氣紛れを天來の奇想の様に感嘆させる事が出来た。御前は俺を犯罪に、夫處か下劣な行動にも、牽き入れる事が出来たらう。御前には分別がないのだから、然かも俺の忠告の實行者となる代りに、

御前は自分一箇の考へで動いてゐたのだから。然し其後俺が反省に目覺めた時、俺の名譽が冒されてゐる事に氣がついた時、俺は偉大な行爲か手柄か發見か夫とも男らしい自殺かによつて其名譽を取り返さうと思つた。俺は從軍したいと思つた、然し夫は出来なかつた。其處で俺は科學に打ち込んだ。今、其事實を摘む爲めに手を伸ばさうとする今、御前は俺の腕を截り離して仕舞ふ。もう俺の名譽は失はれた、俺は此上生きてはゐられない、名譽を失くしては男は生きてゐる事は出来ない。

ラウラ。女は？

大尉。生きてゐられる、女には自分の子供がある、處が男には夫がない。——然し俺達も外の人達も是迄浮か／＼と生きて來た、子供の様に無意識に、空想と理想と幻影とを頭の中に一杯詰めて、夫から俺達は眼が覺めた！。夫はまあ夫でも可かつた、然し俺達は枕の上に脚を置いて眼を覺ました、然かも俺達に眼を覺ませた其人は、當人夢遊病者であつた。女が年をとつて女でなくなる時、其頸に髻が生える、俺は訊く、男が年をとつて男でなくなるとき、男には何が生える？。時をつくるものは、もう當り前の牡雞ではなくなつた、今では去勢された牡雞が時刻をつくる、夫處か牝雞が其呼び聲に返事をする！、だから俺達は、不圖氣がつくと、丁度御伽噺にでもある様に、太陽が昇る筈の時に、月の光を一杯に浴びて、城址の崩れの中に掛けてゐる。夫は恐ろしい夢許り見る朝の一睡に過ぎなかつた、さうして夫は永久に覺める事がない。

ラウラ。貴方は詩人に御なりになると可かつた、ねえ貴方！。

大尉。

どうだか！。

ラウラ。もう私寐くなりましたの、もつと空想が御ありでしたら、明日迄仕舞つといて下さい。

大尉。今ひと言實際問題を。御前は俺を憎んでゐるのか。

ラウラ。え、時々！。貴方が男に御なりになると。

大尉。ぢや是は丸で人種と人種の唾み合ひだ。人間が猿から出来たといふ事が本當なら、少くとも其處には二通りの種類がある筈だ。とにかく御前と俺とは互に似てはゐない。

ラウラ。で、夫が何うしたといふのでございます？。

大尉。俺にはさういふ氣がする、此戦争で二人の内一人は滅びなければならぬ。

ラウラ。どちらが？。

大尉。無論弱い方だ！。

ラウラ。すると強い方は正しいんですか。

大尉。何日でも正しい、強い方は權力を持つてゐる！。

ラウラ。では私は正しいんです。

大尉。一體御前は權力を持つてゐるのか。

ラウラ。ゐますとも、然かも法律上の、明日貴方を禁治産者にして仕舞へば。

大尉。禁治産者に？。

ラウラ。さうです、さうして置いて私は自分の子を自分で教育します、貴方の寐言などには

耳を借さずに。

大尉。夫で、誰が其教育費を拂ふ、俺がゐなくなつたら？。

ラウラ。貴方の年金です！。

大尉。(威嚇する様にラウラにのし掛つて行く) 何うして俺を禁治産者にする？。

ラウラ。(一本の手紙をとり出す) 此手紙の力で、此寫しが證明付きで裁判所へ行つてゐま

す。

大尉。何の手紙だ？。

ラウラ。(後、ひさりをしながら左手の扉口の方へ行く) 貴方のです！。御自分で醫者に氣が

狂つたと書いて御やりになつた！。

大尉。(口を噤んでラウラを眺める)

ラウラ。さ、貴方はもう是で、御氣の毒ながら必要だつた父として扶養者としての役目を御果しになつたんです。貴方にもう用はない、出ていらつしやい。出ていらつしやい、貴方は私の分別が私の意志同様確かりしてゐる事を御覽になつたんだから、然かも貴方は此家にゐて夫を認めようとはなさないんだから！。

大尉。(卓の傍へ行く、火の點つた儘のラムプを攫んでラウラを目掛けて叩きつける、ラウラは後ろざまに扉口を這入つて仕舞ふ)

第三幕

前幕と同じ舞臺装置。然し別のラムプ。タペストリ貼りの扉には一脚の椅子が突つかひ棒にしてある。

第一節

ラウラ、乳母。

ラウラ。 鍵を御貰ひかい。

乳母。 貰ふんでございますつて？。何うしてそんな事が！。ネイトが旦那様の服にブラシを掛けて居りましたから、私隠袋の中から取つて参りました。

ラウラ。 ぢや今日はネイトが當番なんだね？。

乳母。 え、ネイトなのでございます！。

ラウラ。 鍵を御寄越し！。

乳母。 はい、でも何んだか丸で泥棒でございますね。奥さま、まああの二階の足音を御聞なさいまし。行つたり來たり、行つたり來たり。

ラウラ。 扉はちゃんと閉めてあるね？。

乳母。 え、く、ちゃんと閉めてございますとも！。

ラウラ。 (書卓を開けて、揚蓋の前にかける) マルグレット、人情負けをしないやうにおし。氣を落つけて私達皆の者を救はなければならぬ場合ですよ。

(扉を叩く音がする)

ラウラ。 誰だい？。

乳母。 (廊下へ出る扉をあける) ネイトでございます。

ラウラ。 這入れつて。

ネイト。 (這入つて来る) 大佐さんから御用の御手紙でございます！。

ラウラ。 御寄越し！。(讀む) さう！。——ネイト、御前鐵砲だの獵囊だのからパトロンを

すつかり抜いたんだらうね？。

ネイト。 はい、抜きましてございます。

ラウラ。 ぢや、返事の出来る迄、あつちで待つて御出で！。

ネイト。 (去る)

ラウラ。 (書く)

乳母。 ねえ、奥様！。旦那様は二階で何をして御出なのでございませうねえ？。

ラウラ。 黙つて御出で、書いてゐるうちには！。

(鋸の音が聞こえる)

乳母。(半音にて獨語をいふ) あゝ、無事に治まればいゝが!。御仕舞ひには何うなる事だらう!

ラウラ。さ。是をナイトに渡して御出で。夫から御母さんには何んにも耳に入れるんぢやないよ!。いゝかい!

乳母。(扉口へ行く)

ラウラ。(書卓の抽斗を開けて、色々な書類をとり出す)

第二節

ラウラ、牧師椅子をとりラウラの傍に書卓の前に掛ける。

牧師。おい、今晚は。御前も聞いたらうが、俺は今日一日留守でね、今やつと歸つて来た處なんだ。困つた事になつたもんだね!

ラウラ。えゝ、兄さん、こんな晩もこんな日も私生れて初めてですわ。

牧師。夫でもまあ御前は何所にも怪我はなかつた様だね。

ラウラ。えゝ、御蔭様で、でも夫りや危い處だつたの上よ。

牧師。一つ聞きたい事がある、何うしてこんな事になつたんだ?。色々噂をしてゐる様だが。

ラウラ。俺はベルタの父ぢやないなんて途方もない妄想が始まりなんです、夫から火の點い

たラムブを私の顔に投げつけたのが御仕舞なんです。

牧師。そりや危ない!。全然氣狂ひの沙汰だ。夫ではから何うしようといふのだね?

ラウラ。又暴れ出さない様にしなけりやならないのです、ドクトルが病院に狹窄衣をとり

やつて下さいました。其間に私は大佐の處へ使をやりました、是から家の收入だのなんかを一々

心得て置かうと思つてゐる處です、何しろ彼が非道くだらしのない事をしてゐるのですから。

牧師。悲しい話だね、然しこんな事になりやしないかと始終俺は氣遣つてはゐたんだ。火と

水と——是は最後は爆發するに極まつてゐる!。そりや何だい、その抽斗にあるのは?

ラウラ。(書卓の抽斗を一つ抜き出す) まあ、いろんなものを藏つてゐるの上よ!

牧師。おや!。御前の人形を藏つてゐるね、夫から夫りや御前の洗禮の時の帽子だ、夫

からベルタのガラ、それから御前の手紙、夫からメダイオン……(眼を拭く)。ラウラ、で

もあの男は御前を非常に愛してゐたんだよ。こんなもの俺なんか藏つちやゐない!

ラウラ。えゝ私もさう思つてゐます、元は私を愛してゐたんです、然し時が、時が色ろんな

ものを變へます!

牧師。その大きな紙は何なんだい?。——墓地の買入證書だね!——まつたく、氣狂ひ病院

より墓の方が可い!。ラウラ!。俺に云へ、本當に御前には少しも罪はないのか?

ラウラ。私に?。一人の人間が氣狂ひになるといふのに、私はなんの罪のありやうがありま

す。

牧師。さうか、さうか!。俺は何んにも云ふまい!。何といつても血は水より濃いから!

ラウラ。 と仰しやるのは何ういふ事なんですか。

牧師。 (ラウラを凝と見る) ね、おい！

ラウラ。 なんですか？

牧師。 ね、おい！。兎に角御前には是丈の事は否定出来まい、是が御前の望みに、自分一人でベルタを教育したいといふ御前の望みに叶ふのだといふ事は。

ラウラ。 貴方の仰しやる事は私には分からない！

牧師。 俺は御前に敬服する！

ラウラ。 私に！。ふむ！

牧師。 夫で俺が此自由思想家の後見人になるのだな！。實を云ふと、俺は平生からあの男を、俺達の畑に生えた雑草だと思つてゐたんだ！

ラウラ。 (短い噛み殺した笑ひ、其後で急に六つかしい顔をして) さうして夫を貴方は能くも私に、彼の妻に、仰しやるんですね！

牧師。 ラウラ、まつたく御前は強い！。信じられない程も強い！。畏にかゝつた狐の様に、御前は、人に捕まる程なら、自分で自分の脚を噛み切らうといふ女だ！。——大泥棒の様に、共犯者一人持つてゐない、自分の良心さへも！。——鏡を見て御覽！。夫は御前には出来まい！

ラウラ。 鏡なんか決して使つた事はありません！

牧師。 さうぢやない、御前には夫が出来ないんだ！。——御前の手を見せてくれ！。——罪を裏切る血の痕もない、悪巧みの毒の跡もない！。小さな無邪氣な人殺しだ、夫を法律では何う

する事も出来ない、無意識の犯罪だ、無意識！。うまい名前をみつけたものだね！

ラウラ。 貴方は色ろんな事をべちやく／＼仰しやいますね、御自分で良心に咎められでもする様に！。——出来るものなら、私を訴へて御覽なさい！

牧師。 男としては、俺は御前を首斬り臺へ引張つて行きたい位だ。兄として牧師としては御日出度うをいふ！。——おい、あの男は頻りに鋸を使つてゐるぢやないか。屹度！

ラウラ、氣を注げてゐないと、若しあの男が飛び出して來たら

ラウラ。 (不安さうに立上がつて) 飛び出して來たら

牧師。 御前を鋸びきにして仕舞ふせ！

ラウラ。 (鐵砲の處へ行つて) 抜いてある！。みんな抜いてある！——ナイト！。——御前は！。いゝよ！。いゝよ！。あゝ、やつとドクトルが入らしつた。

第三節

前四の人々。ドクトル。

ラウラ。 (ドクトルを迎ひに行つて) ドクトルさん、よく来て下さいました。——今度こそ貴方も御認めになりましたでせう？

ドクトル。 暴行が行はれたといふ事は、私も認めてゐます、然し是を疝癢の破裂と見るべき

であるか狂氣の破裂と見るべきであるか、まだ問題だと思ひます！。

牧師。然し破裂其物は兎に角、あの男が強迫観念を持つてゐるといふ事は、貴方も御認めになるんでせう。

ドクトル。牧師さん、私には、貴方の強迫観念の方がもつと劇しい様に思はれますよ！。

牧師。最高存在に關する私の持論は……

ドクトル。論はよしませう！。——奥さん、御主人を監獄へ御遣りになるか癪狂院へ御入れになるか、是は貴女の御考へ一つですよ！。大尉の擧動を貴女は何う御思ひになりますか？。

ラウラ。私只今夫に御答へする事は出来ません！。

ドクトル。すると、何うする事が家族の利害に最も都合であるかといふ事に、別に判然した御意見がないのでございますね？。牧師さん、貴方は何う御思ひになりますか？。

牧師。え、監獄にしても癪狂院にしても大變な評判になる事とせう……すぐ何うとも云へませんね。

ラウラ。でも罰金だけで済むやうな事にでもなりましたら、又あとで暴行をするに極つてゐます。

牧師。夫ぢや、監獄へ御這入りになつても、またすぐ出ていらつしやる、すると直ぐ復讐をなさるに極つてゐる。夫ぢや親族會議で定めて下さい！。

(ラウラと牧師と小聲で相談する)

(間)

牧師。思ひ切つて、正義に従ふ事にしませう！。

ラウラ。ドクトルさん、一寸！。貴方はまだ——病人に對する貴方の意見を云つて下さらない。

ドクトル。私の鑑定を云へと仰しやいますのなら、私は何方かといへば、罪人よりも病人と見るべきだと思つてゐます。氣狂ひであるなしはとにかく、用心をする必要はある、此先御——病人が又——亂暴の出来ない様に。婆やさんは何處にゐますか？。

ラウラ。何うなさるのでございますか？。

ドクトル。狹窄衣を着せて貰ふのです、尤も私が御病人と御話をした見た上でいゝと云つてからの事ですが！。さう云ふ迄は不可ません！。私は其——服を外に置いてゐます！。(屏の處へ行き、大きな包みを持つて歸つて來る)どうか、乳母さんと呼んで下さい！。

ラウラ。(呼鈴を鳴らす)

牧師。「活ける神の手に陥るは畏るべき事なり」

乳母。(這入つて來る)

ドクトル。(狹窄衣をとり出す)是です！。(皆驚ろく)よござんすか！。是を持つて大尉の後ろへそつと行つて下さい、もつとも此先亂暴を防ぐ爲めには是を御着せする必要があると私が認めた時の事です。御覽の通り、是は恐ろしく袖が長い、是は運動を自由にさせない爲なんです。で、是を背中で結くのです。茲處に締金のついた革紐が二本ある、是をあとで椅子の背中でもソファでも、何處でも都合のいゝ處に、縛りつけるのです。貴女やつて呉れますか。

乳母。 いゝえ、ドクトルさん、そんな事私には出来ません、私には出来ません。
 ラウラ。 ドクトルさん、何うして貴方御自分でなさつて下さらないんです？
 ドクトル。 御病人が私を信用なさらないから。奥さん、是には貴女が一番好いのですが、然し何れも貴女も信用して御出でゝはない様だから。
 ラウラ。 (一種拒否する様な顔つきをする)
 ドクトル。 何うですか貴方だつたら、牧師さん……
 牧師。 いや、願ひ下げにします！

第四節

前節の人々。ネイト。

ラウラ。 手紙を御渡して来たのかい。
 ネイト。 はい！
 ドクトル。 あゝ君なんです、ネイト！。君には事情が分かつてゐる、大尉が氣が狂つたといふ事も知つてゐる。君手傳つて呉れ玉へ。病人の用をして呉れ玉へ。
 ネイト。 大尉さんの爲めに御役に立つ事が御座いましたら、私何んな事でも致します！。
 ドクトル。 大尉に此衣物を着せて呉れ玉へ……

乳母。 不可ません、あれに御觸らせになつちや不可ません！。ネイトは指一本觸る事はなりません。夫程なら私がいいたします、そうつと、そうつと！。ネイトは扉口に待つてゐて、用のあるとき手傳つて貰ふ事にしませう……えゝ、是非さうして貰ひませう。

(タベストリ貼の扉を叩く音がする)

ドクトル。 大尉だ！。其服をあの椅子の上の貴女のショールの下に置いて、皆さん暫らく彼方へ入らしつて、下さい、私と牧師とで御待ちしてゐる事にします、もう扉が長くは持たない。——早く！。

乳母。 (左へ出て行く) 神様、御助け下さいまし！。

ラウラ。 (書卓を閉ぢて、左へ出て行く)

ネイト。 (正面奥へ出て行く)

第五節

タベストリ貼の扉に劇しく打突かる音がする、錠が飛んで、椅子が床の上に投げ出される。大尉が本を一抱へ抱へ込んで、手に鋸を持つて現はれる、襦袢一枚になつてゐる。髪の手が逆立つてゐる、おどくした同時に兇暴な顔つきをしてゐる。ドクトルと牧師

大尉。 (本を卓の上に置く) 此所に何もかもかいてある、何の本にも、だか、俺は氣が狂つ

たんぢやない!。此所に『オデュイッサー』の第一唱第二百十五行に書いてある、テレマツヒュスがアテネに云ふ、「さなり、わが母は、わが母は云ふ、彼こそは(是が即ちオデュイッイスの事なんだ)汝が父ぞと、されど我は自ら夫を知る由もなし、世に、何人が己が父なるか、そを知る者の非らざれば」。然かもかういふ疑ひをテレマツヒュスがペネロペに對して、あの有ゆる女のうちで最も徳の高いペネロペに對して抱いてゐる。面白い。さうぢやないのか!。此所に豫言者へゼキエルがある、一痴人は云ふ、見よ此所に我が父ありと、されど、何人の精が彼を作れるか、誰かそを知る事を得む。全く其通りだ!。是は何だ?。メルスレコフの露西亞文學史か。一露西亞最大の詩人なるアレクサンデル・プシキンは、決闘にて胸に受けたる彈丸の爲といふよりも、寧ろ妻の不貞に關する流言の爲に死したるものなり。臨終の床に於て彼は、妻の潔白なる事を、誓ひぬ。馬鹿野郎!。馬鹿野郎!。何うしてそんな事が誓へた!。——然しみんな、俺の本を讀むのを聞いてゐるのか!。——おや、これは、ヨナス、君此所にゐたのか!。夫からドクトルも、何も不思議はない!。君等は俺が英國の貴夫人に何と返事をしたか知つてるか、愛蘭土人は火の點いてゐるラムプを細君の顔に叩きつけるといふ話を聞いて?。——え、何て女だ、と俺は云つた!。——女ですつて?と其女は口の中で云つた!。——女ですとも、無論!と俺が答へた。一人の男が、自分の妻を愛し崇拜してゐた一人の男が、火の點いたラムプを攫んで夫を細君の顔に叩きつける、叩きつける迄になるとすりや、さうすりや大抵分かりさうなものぢやないか!。……

牧師。

何が分かる?。

大尉。

何んにも!。決して何んにも分かりはしない、唯信じるきりなんだ、さうぢやないか、

ヨナス?。信ぜよ、さらば幸あらん!。幸ひ?……いや、俺は知つてゐる、人ば信じて不幸にもなり得るものだ!。夫を俺は知つてゐる!

ドクトル。

大尉さん!

大尉。

しつ!。貴方とは話しがしたくない!。私は貴方が電話の様に取り次ぎをするのを聞きたくない、あすこの部屋で饒舌つてゐる事を。あすこの部屋で!。よござんすか!。——おい、

ヨナス、君は君の子供等の父であるといふ事を信じてゐるのか?。俺は覺えてゐる、君の處には家庭教師がゐたぢやないか、美しい眼をしてゐて世間の人から色々噂をされてゐた。

牧師。

アドルフ、しつかりしないか!

大尉。

靈の下を觸つて見ろ、角が二本生えてゐるかも知れない。あ、蒼くなるな!。さうだ

さうだ、世間の奴等は噂をする丈なんだ、然しまつたく、彼奴等は噂をし過ぎる。とは云つても俺達はみんな滑稽な馬鹿揃ひなんだね、俺達亭主といふものは。ドクトルさん、さうぢやありませんか?。何うですね、貴方の處の寢床は何んな工合です?。貴方の家に中尉か何かのやませんでしたか、え?。待つて入らつしやい、當てゝ見せるから!。かういふ名前の!。(ドクトルに何事をか囁く)ほうら、此人も蒼くなる!。憤つちや不可ない。何しろ奥さんは死んでるんだからさうして墓の中に這入つてゐるんだから、夫に一度あつた事は二度と取り返しはつかないんだから!。然し私は其男を知つてゐるんです、其男は今——ドクトル、私の顔を御覽なさい!——いや、ちやんと私の眼を——龍騎兵の少佐ですぜ!。賭でもする、屹度、此人にも角が生えてるか

ドクトル。(立腹を押へて) 大尉さん、何か外の話をしませう!

大尉。ほうら!。俺が角の話をしようとする、いきなり此人は外の話をしようといふ!。
牧師。おい、君、君は気が狂つてゐるんだよ。

大尉。さうだ、夫は俺にもよく分かつてゐる。然し君達の其折紙つきの頭を暫らく俺の手にかけさせて見るが可い、忽のうちに君達も氣狂ひにして見せるから!。俺は気が狂つてゐる、然し何うして俺は氣狂ひになつたのか。夫は君達には何の關係もない、又誰にも少しの關係もない!。何か外の話をしろと云ふのか?。(卓から寫眞帖をとる) あつ、是は俺の子だ!。俺のものだ!。夫が俺達には分からないと云ふのか?。夫が分かる爲には、俺達は何うすれば可いか、知つてるか?。先づ人は社會的に格式を得る爲めに結婚する、夫から直ぐ離婚する、さうして戀人と戀人となる、夫から子供を貰つて来る。さうすりや少くとも、其子が自分達の養子だといふ事は、確に分かる!。夫は間違ひはあるまいが?。然しそんな事の凡てが今俺に何の役に立つ?。皆んなして俺から俺の永遠を奪ひ去つた今、夫が俺に何の役に立つ?。俺が其爲めに生きる事の出来る何物も持たないとすれば、科學も哲學も何う俺を樂ませよう?。俺が何の名譽をも持つてゐないとすれば、俺は人生を何うしよう?。俺は俺の右の腕を、腦髓の半分を、脊髓の半分を、外の幹に接木した、夫は合はさつて成長して一層完全な一本の木になると信じたからなんだ、すると誰かナイフを持つて來て夫を接ぎ目から切り放して仕舞ふ、だから俺は今唯の半分の木に過ぎない、然かも片方は俺の腕と俺の半分の腦髓とを持つて續いて大きくなつて行く、然るに俺は萎れて死んで行く、俺の遣つたのは俺の一番好い處だつたんだから。俺はもう死にたい!。

俺を何うとも勝手にするが可い!。俺はもうゐない!

(ドクトル牧師と耳語する、二人は左手の部屋へ這入つて行く。直ぐ其後でベルタが出て來る)

第六節

大尉、ベルタ、後に乳母。

大尉。(ぐつたりして卓の傍にかける)

ベルタ。(彼の傍へ行く) 父様、貴方御加減が悪いの?。

大尉。(むつとして眼を上げる) 俺が?。

ベルタ。貴方何んな事をしたか御存知なの?。母様にラムプを御投げつけになつた事、御存知なの?。

大尉。俺がそんな事を?。

ベルタ。え、なかつたわよ!。母様が怪我でもしたら、どうなさるの!。

大尉。したつて構はないぢやないか。

ベルタ。そんな事仰しやる様だつたら、貴方は私の御父様ぢやない!

大尉。何だつて?。俺が御前の父ぢやない!。何うして夫を知つてゐる?。誰がさう云つて

聞かせた?。そんなら誰が御前の父なんだ?。誰だ?。

ベルタ。 え、兎に角貴方ぢやないわ！

大尉。 何日でも俺ぢやない！。そんなら誰だ？。誰だ？。御前はちやんと教へられてゐるんだな！。誰が教へた？。今更こんな目に遭はなけりやならないのか、自分の子がやつて来て、向きつけに、貴方は私の父ぢやないと云ふ！。然し、そんな事を云へば、夫で御前は御前の御母さんの悪る口を云つてゐる事になるのが、分からないのか？。若し御前の云ふ通りだと、夫は御母さんの恥だぞ！。

ベルタ。 母様の悪口を仰やるものぢやなくつてよ、ね！。

大尉。 あゝ、御前達は共謀になつてゐるな、皆んな寄つて俺を目の仇にして？。御前達は昔からずうつと共謀になつて来てゐるんだ！。

ベルタ。 父様！。

大尉。 其言葉は最早使つて呉れるな！。

ベルタ。 父様、父様！。

大尉。 (ベルタを引き寄せる) ベルタ、いゝ子だ、何といつても御前は俺の子なんだ！。さうだ、さうだ！。何うして俺の子でないなんて事があり得よう。其通りだ！。あんな事を云つたのは、ベストや熱病の様に風と一緒に往つたり来たりする、病的な考へに過ぎなかつたんだ。俺の顔を御覽、俺は御前の眼の中にある俺の魂が見たい！。——然し俺にはあの女の魂も見えない！。御前は二つの魂を持つてゐる、御前は片方で俺を愛し片方で俺を憎んでゐる。然し御前は俺を愛する丈にしなくては不可ない！。御前は唯一つの魂丈を持たなくては不可ない、夫でなけ

れば御前は決して平和を得られない、俺も得られない。御前は唯一つの考へ丈を、俺の考への子である考へ丈を持たなくては不可ない、御前は唯一つの意志丈を、俺の意志丈を持たなくては不可ない。

ベルタ。 私は厭です！。私は私になります！。

大尉。 夫は御前には許されぬ！。可いか、俺は人喰ひだぞ、俺は御前を喰つて仕舞ふ。御前の御母さんは俺を喰はうとした、然し夫が出来なかつた。ザッルンは、此方が子供を喰はなけりや子供から喰はれると豫言された、だから自分の子供を喰つて仕舞つた、俺は其ザッルンだ。喰へ、夫でなけりや喰はれる！。是が問題だ！。俺が御前を喰はなけりや、御前が俺を喰ふ、御前は最早俺に齒を剝いて見せてゐる！。然し、いゝ子だ、心配するな、俺は何んにもしやしない！。(武器を集めた處へ行つてピストルを手にとる)

ベルタ。 (逃出さうとする) 助けて、母様、助けて、殺されるから！。

乳母。 (這入つて来る) アドルフ様、何うなさつたのでございます？。

大尉。 (短銃を檢める) 貴様バトロンを抜いたのか？。

乳母。 え、いゝ、私が棄てて仕舞ひました、でも此所へ掛けて大人しくさへしていらつしやれば、私持つて来て差上げます！。(大尉の腕を捕まへて椅子の上に据ゑる、大尉は茫然として掛けてゐる。夫から乳母は狭窄衣を取り出して、椅子の後ろへ廻る)

(ベルタは左手の部屋へ抜け出す)

乳母。 アドルフ様、アドルフ様はまだ覚えて御出でございませうか、丸で私の秘蔵つ子のや

うにして御育てしてゐた時分、夜になると私がアドルフ様に蒲團を御掛けしては、神様に御祈りを上げて居りました。夫からアドルフ様は覺えて御出で、ございませうか、私は夜中に起きては、御乳を差し上げて居りました。アドルフ様は覺えて御出で、ございませうか、アドルフ様が怖い夢を御覽になつて御眠みになれない様な折は、私が灯を點けては、面白い御喃を御聞かせ申して居りました。アドルフ様はまだ其時の事を覺えて御出で、ございませうか？

大尉 マルグレット、もつと話して呉れ！。御前の聲は甘い眠りの様に俺の頭を落ちつけて呉れる！。もつと話して呉れ！。

乳母 え、え、致しませうと、大人しく御聞きなさいまし！。アドルフ様は覺えて御出で、ございませうか、ある時アドルフ様は船を刻むのだ仰しやつて臺所の大きなナイフを御持ち出しになりました、其處へ私が這入つて參つて、アドルフ様を御騙しして夫を取り上げる事になりました。アドルフ様は聞き分けのない坊ちやまで入らした、だから御騙し申すより外に仕様がございませうでした、自分の爲めを思つてして呉れるのだとはアドルフ様は何うしても御思ひにならなかつたからでございませう。——私さう申し上げました、其蛇を此方へ御寄越しなさいまし、さうしないと喰ひつきますよ。すると、ほら、アドルフ様は其ナイフを御放しになりました！。大尉の手から短銃を取去る。夫から又、衣物を着るのが厭だと仰しやつて、駄々を御捏ねになる時には、仕方がないからさう申し上げて居りました、金や銀の飾をつけた衣物を着せて差し上げます、早く着て王子様のやうに御なりになさいまし。夫から、小さな袖無を、本當は青い色の羅紗でしか拵らへてはない小さな袖無を手を取つて、アドルフ様の胸の前へ出して、さあ手を御

入れなさいましと申し上げました！。夫から私申し上げました、背中で扣鈕をとめて上げます、其間ちやんと大人しくして御出でなさいまし！。(大尉に狭窄衣を着せて仕舞ふ。夫から私申し上げました、さ立つて、御部屋の中を歩行いて御覽なさいまし、似合ふか何うか見て差し上げますから) (大尉をソファへ連れて行く)。夫から私申し上げました、さあ御休みなさいまし。

大尉 御前何を云ふのだ？。着物を着て仕舞つた計りなのに、寝ろなんて！。——畜生！。貴様は俺を何うしたんだ！。(衣物を脱がうとして蕩搔く)。あ、悪黨め！。貴様に是丈の智慧があらうとは、夢にも思はなかつた！。(ソファの上に横になる)。捕まへられて、縛られて、謀られて、さうして死ぬ事も許されぬ！。

乳母 アドルフ様、赦して下さいませ、御嬢様を殺させたくないばかりにこんな事を致しました！。

大尉 なぜあの子を殺させない！。生は地獄だ、死は天國だ、子供は天國にゐるべきものだ！。

乳母 旦那様、何が、死の後には何が參るか、旦那様は御存知でございませうか。

大尉 夫が人の知つてゐるたつた一つの事なんだ、生に就いては何んにも知らない！。あ、初めから其事に氣がついてゐたら！。

乳母 アドルフ様！。貴方の其我を折つて、神様に御慈悲を御願ひなさいまし、まだ決して遅くはございませうから。十字架にかけられた罪人にさへ遅いといふ事はございませうでした、今日なんぢは我と偕に樂園に在るべし、と基督様が仰しやいました！。

大尉。 貴様は最早死骸を目がけてがあく／＼鳴くのか、婆あ鴨め！。

乳母。 (隠囊から聖歌集をとり出す)

大尉。 (聲を揚げて) ネイト！。 ネイトはゐないか！。

ネイト。 (来る)

大尉。 此女を投げ出しちまへ！。 此女は聖歌集で俺を苛め殺さうとしてゐる。窓からでも、煙突からでも、何所からでも可い、放り出しちまへ！。

ネイト。 (乳母の顔を見る) 何でございませうが、大尉さん、それは、それは私には何うも！。 まつたく私には何うも！。 野郎なら六人ゐたつて何んでもありませんが、何うも女は！。

大尉。 貴様女一人が片づけられないのか、え？。

ネイト。 片づけるのは何んでもございませう、ですけども、大尉さん、女は特別なものでございませうから、女に手を當るのは何うも。

大尉。 特別だ？ 彼女は俺に手を當てたぢやないか。

ネイト。 夫りやさうぢやございませうが、私には何うも！。 丁度、牧師さんを打てと御云ひつけになる様なもので！。 神様の掟に背く様な氣が致すのでございませうから！。 私には何うも！。

第七節

前節の人々。 ラウラ。 ラウラがネイトに去れといふ合圖をする。

大尉。 オムファアーレ！。 オムファアーレ！。 ヘルクレスは貴様の絲を紡いでゐるのに、貴様は武器を玩具にしてゐる！。

ラウラ。 (ソファに歩行み寄る) アドルフ！。 私の顔を御覽なさい！。 貴方は私を貴方の敵だと御思ひになりますか。

大尉。 さうだ、俺はさう思ふ！。 俺は、御前達凡てを俺の敵だと思つてゐる！。 俺の母は、俺が苦しみをかけて生れて來るといふ理由で俺を生みながらなかつた俺の母は、俺の敵だつた、胎内にゐる内から俺の營養を奪つて、俺を殆んど片輪にして仕舞つた！。 俺の姉は俺の敵だつた、姉は俺に姉の家來になる事を教へた。俺が抱いた最初の女は俺の敵だつた、其女は愛情の返しに俺に十年の病氣を寄越した。俺の娘は、俺につくか御前につくかの瀬戸際になつて、俺の敵になつて仕舞つた。さうして御前は、俺の妻の御前は、俺の命がけの敵だつた、御前は俺が息が絶えて床の上に顛がる迄は、俺を放さうとしなかつた！。

ラウラ。 貴方の仰やる様な事を、私今迄した覺えも考へた覺えもございませう。そりや、貴方が邪魔だから取り除いて仕舞ひたいと、心の中で漠然考へてゐた事は、あるかも知れない——其私にする事に筋が立つてゐるからと仰しやるかも知れませんが、夫は自然に筋は立つたので、私はちつとも氣がつかずにゐた事なんです。私は是迄の事を後で考へ返して見たことなんかありません、是迄の事は皆んな貴方が御自分で御置きになつた軌道の上を滑つて行つた丈なので、だから、よし私は結果の上からは無罪ではないにしても、神様の前にも良心の前にも私は自分の無罪を信じてゐます。貴方の存在は私の胸の上に置かれた石の様なものでした、私は壓し付けら

れ／＼到頭其重みに耐へ切れなくなつて夫を振り落さうとした迄の事なんです。夫に違ひないと思ひます、だから知らない間に貴方を非道い目に遭はせてゐるのなら、私貴方に御詫いたします。

大尉。 如何にも尤もらしく聞こえる！。然し夫が俺に何になる？。そんなら罪は誰が被る？。精神的結婚が被るとでもいふのか？。昔は人は一人の女と結婚した、今では人は取引をしてゐる女と合名會社をつくる、若しくは友人と同棲する！。それから人は相手の其社主を孕ませる若しくは其友人を辱かしめる！。愛は、健全な、感覺的な愛は何處に行つた？。其御蔭で死んで仕舞つたんだ！。そんなら、株式組織の其愛から、連帯責任を持たない何んな相續者が、社主として指定されるんだ？。破産をするとき、社主には誰がなる？。精神的な子供の肉體的の父は誰だ。

ラウラ。

夫から貴方の嫌疑の事でございますが、あれは丸で根拠のない事でございます。

大尉。 夫だからこそ怖ろしい！。少くとも何等かの根拠があつたら、其時は兎も角も攫み又は捕まる事の出来るものがある。然し玆處には影丈しかない、茂みに隠れて首丈出して笑つてゐる、丁度空氣と攫み合ひをする様なものだ、火薬丈で戦さの眞似をする様なものだ。何んなに苦しくつても現實なら反抗を喚び起す、命と魂とに實行の勇氣を與へる、然し今……考へは霧の中に溶け込んで仕舞ふ、頭は空車を廻はして終には火を出す！。頭の下に枕をかつて呉れ！。何か掛けて呉れ、俺は凍える！。俺は死にさうに凍える！。

ラウラ。

(自分のシヨールをとつて、大尉の上に廣げる)

乳母。

(枕をとりに出て行く)

ラウラ。

貴方、貴方の手を出して下さいまし！。

大尉。

手を！。貴様が此背中に縛り付けた手を。オムファアーレ！。オムファアーレ！。だが

御前の軟らかなシヨールが俺の口に觸れる、御前の腕の様に暖かい觸りが濃かい、さうして若かつた折の御前の髪の様子がグアニラの匂ひがする！。ラウラ、御前が若かつた時、よく俺達は白樺の森を歩行いたな、俺達は櫻草を摘んだ、鶉の歌は俺達の戀の囁の合間を縫つた——あ、何んなに好い心持だつたらう、何んなに！。あの時分は生活が何んなに美しかつたらう、夫が今又何んなに怖ろしいものになつたらう。かうなるやうには、御前も望みはしなかつた、俺も望みはしなかつた、然かもこんなになつて仕舞つた。全體此生活を支配してゐるのは誰だ！。

ラウラ。

神様御一人が……

大尉。

そんなら戦さの神様だ！。夫とも此際女神かも知れない！。俺の上にもる猫を退けて

呉れ！。退けて呉れ！。

乳母。

(枕を持つて来る、シヨールを除ける)

大尉。

俺の軍服を呉れ！。俺に掛けて呉れ！。

乳母。

(軍服を衣桁からとつて、大尉に掛ける)

大尉。

あ、俺の硬い獅子の皮、是を貴様は剥ぎ取らうとしたんだ！。オムファアーレ！。オムファアーレ！。奸婦、大人しい顔付きをして知らない間に武装を解かせる！。ヘルクレス、眼を

覺ませ、女が御前の武器を奪るぞ！。貴様は誤魔化して俺達の鎧迄も奪らうとしてゐる、貴様は夫がほんの裝飾に過ぎないと俺達に思ひ込ませた。違ふぞ、鎧は鐵だつたんだぞ、裝飾になつて仕舞ふ迄は。昔は鍛冶屋が軍服を造つた、然し今は縫箔師が造る！。オムファアーレ！。オムファアーレ！。オムファアーレ！。

「レ！。荒い力は狡猾な弱蟲に降参してしまつた！。畜生、氣を付けろ、悪魔、貴様の同族は呪を受けろ！。(起き上がつて唾を吐かうとする、然し又ぐたりと倒れる) マルグレット、何んといふ枕を持つて来たんだ！。此枕は非常に堅い非常に冷たい、非常に冷たい！。此所へ来て、俺の傍に椅子に掛けて呉れ。さうだ！。御前の膝に枕をさせて呉れ？。さうだ！。——あゝ暖かい！。俺の上に屈んで呉れ、胸に觸れる様に！。——あゝ女の胸に凭りかゝつて寐るのは好い心持だ、母の胸でも可い、戀人の胸でも可い、然し母の胸が一番可い！。

ラウラ。アドルフ、貴方の子供に御會ひになりたくはありませんか？。え？。

大尉。俺の子供？。男は決して子供を持つてゐない、子供のあるのは女丈なんだ、だから未來は女のものなんだ、俺達は子なしで死んで行く！。——あゝ神様、子供を愛する神様！。

乳母。まあ、神様に御祈を上げていらつしやいますよ！。

大尉。さうぢやない、御前に祈るのだ、俺を寐かして呉れ、俺は非常に疲れてゐる、非常！。マルグレット、御休み、女の内で御前には幸福が来る様に。(起き上がる、然し一聲叫び聲を擧げて乳母の膝に倒れかゝる)。

第八節

ラウラ左手へ行きドクトルを呼び入れる。ドクトルは牧師と一緒に這入つて来る。

ラウラ。ドクトルさん、手遅れでないのですしたら、何うにかなさつて下さい！。御覽なさい、もう呼吸を致しません！。

ドクトル。(病人の脈を檢める) 是は卒倒です！。

牧師。死んだのですか。

ドクトル。いゝえ、生き返られはなさいます、然し何んなになつて生き返られるか、夫は分からぬ。

牧師。初めに死、夫から審判……

ドクトル。審判も要らない！。告訴も要らない！。貴方が、神が人間の運命を左右すると信じて御出になる貴方が、神に此事件を話して御聞かせになるが可しい。

乳母。あ、牧師様、且那様は御臨終に神様に御祈りなさいました！。

牧師。(ラウラに) 本當か？。

ラウラ。本當です！。

ドクトル。若しさうだつたら、それは私には此病氣の原因と同じ様に判断する力はないのだが、若しさうだつたら、私の技術はもう御仕舞ひになります。是からは、牧師さん、貴方の領分です！。

ラウラ。ドクトルさん、此臨終の床の側で貴方の仰つて下さる事は、夫丈でございますか。

ドクトル。是丈です！。此先を私は知らない。此先を心得ていらつしやる方は、仰やるが宜しい。

ベルタ。
 ラウラ。
 牧師。
 アーメン！
 （右手から這入つて来て、母を目がけて飛んで行く）
 母様、母様！
 私の子！。私一人の子！。

昭和二年七月十五日
 印刷發行

父 ★
 定價二十錢

岩波文庫
 62



譯者

小宮 豊隆

發行者

東京市神田區南神保町十六番地
 岩波 茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
 菊地 眞次郎

株式會社英秀印刷

發行所

東京市神田區
 南神保町十六番地

岩波書店

電話九段二一〇九番
 振替東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波書店

岩波文庫發刊に際して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近來流行の大量出版物を見るに、或は唯廣告と宣傳とに力を専らにして、その内容に至つては杜撰到底眞面目なる人々の渴望を満足し得ることなく、或は豫約の手段によつて讀者を制限するとともに讀者を繋縛し、徒らに學藝解放の美名を僭するに過ぎないのがつねである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行

することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの學に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫

- 此文庫は、普及を第一義として刊行する學生用、携帶用の廉價版です。
- 内容の精選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。
- 最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。
- 購求の自由 しかも讀者が全く自由に、欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を執りました。
- 方法は、範を廣く内外に究めたる結果、最合理的普及版たる獨のレクラムを則りました。
- 編次はたゞ發行順に従つて之を追ふものであります。
- 約百頁を單位として星一つを以てそ

れを現はし、*一つ毎に二十錢の定價です。

□*一つづつを以て此の文庫の番號を數へます。

□*或は*****は、それぞれ二百頁或は五百頁の本一冊なる事を示し、百頁のもの二冊或は五冊ではないのです。*七つ位迄は一冊に纏まるつもりです。

□送料(及定價)は左表によります。

*****	定價二十錢送料二錢
****	四十錢 送料四錢
***	六十錢 送料六錢
**	八十錢 送料八錢
*	一百二十錢 送料一圓
*****	一圓四十錢 送料一圓

新萬葉集 佐佐木信綱編

- 1-7 新萬葉集 佐佐木信綱編 *****
- 8-9 こゝろ夏目漱石著 *****
- 10 ブラソクテテスの辯明久保 勉註 *
- 11-12 トンカン 實踐理性批判 波多野精一譯 *
- 13 古事記 幸田成友校訂 *****
- 14-15 藤村詩抄 島崎藤村自選 *****
- 16-21 ミス國富論上巻 氣賀勲重譯 *****
- 22-31 (未刊)
- 32 にくりら べ 樋口一葉著 *
- 33 國姓爺合戦 近松門左衛門作 遠の権三重帷子和田萬吉校訂 *

戦争と平和第一巻 トルストイ

- 34-38 戦争と平和第一巻 トルストイ *****
- 39-55 (未刊)
- 56-58 芭蕉七部集 藤松宇校訂 *****
- 59 五重塔 幸田露伴著 *
- 60-61 病牀六尺 正岡子規著 *****
- 62 父 ストリンベルグ作 小宮隆譯 *
- 63-64 出家とその弟子 倉田百三著 *****
- 65 櫻の園 チエー・フ作 米川正夫譯 *
- 66 幸福者 武者小宮實著 *****
- 68 號外 他六篇 岡本田蜀著 *

- 61-70 科學の價值 田邊 元譯 ★★★
- 71-73 認識の對象 山内 得守譯 ★★★
- 74 我ら 春 集萩原 泉水校訂 ★
- 75-76 北村透谷集 島崎 藤村編 ★★
- 77-78 賢者ナータン 大庭 米治譯 ★★
- 79 春の目ざめ 野上 豊一譯 ★★
- 80 令嬢ユリ 茅野 蕭々譯 ★
- 81 會我 會橋 山 近松門左衛門作 ★
- 82 閣の力 米川 正夫譯 ★
- 83-84 仰臥漫錄 正岡 子規著 ★★

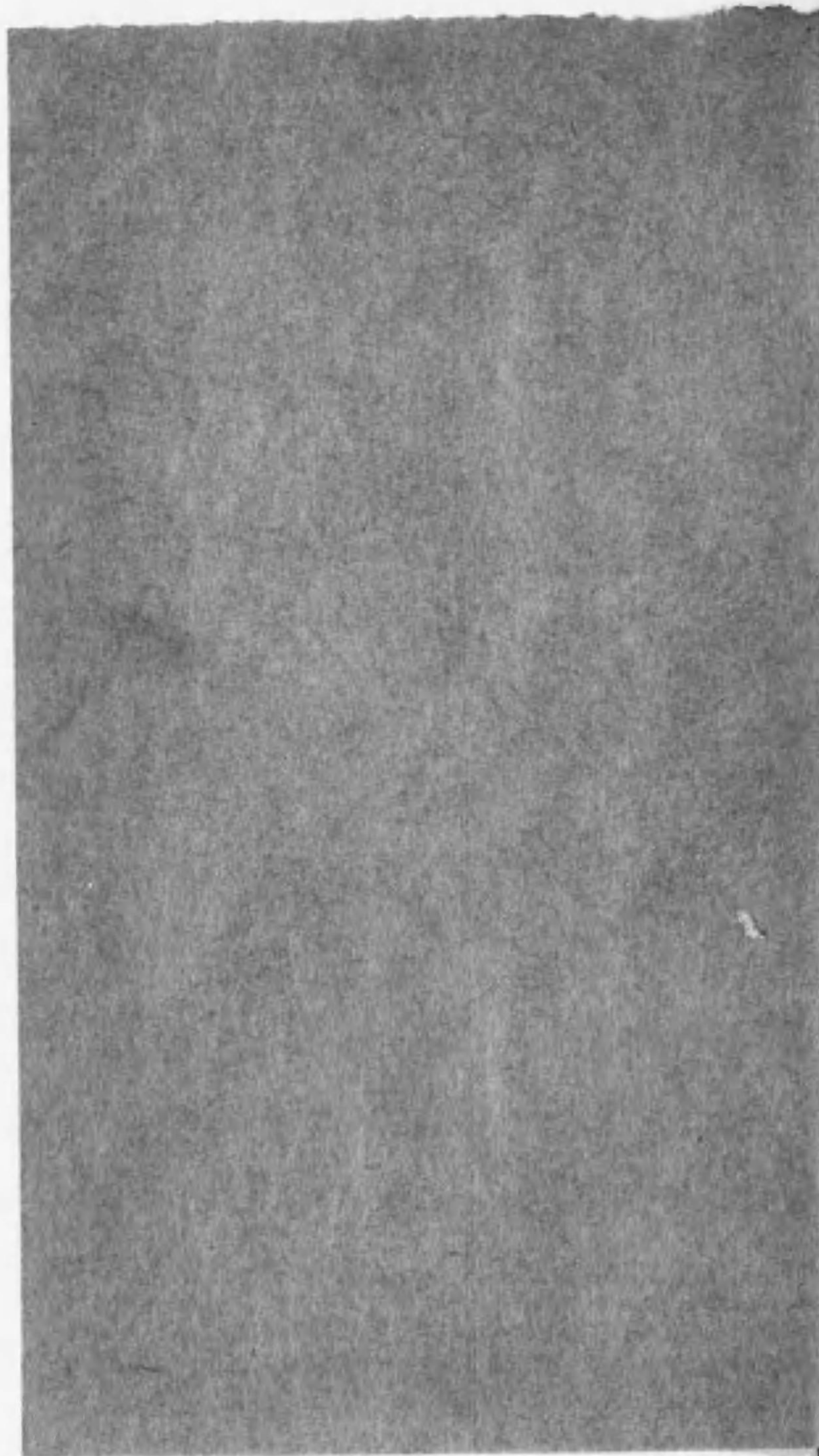
- 85-87 科學と方法 吉田 洋一譯 ★★★
- 88 伯父ワニーニヤ 米川 正夫譯 ★
- 89 生ける屍 米川 正夫譯 ★

以下近く刊行の豫定

- カント純粹理性批判 上卷 天 野 貞 祐譯
- カンプロレゴメナ 天 野 貞 祐譯
- シユライエルマツヘル 宗教論 石 原 謙譯
- ボンデルバント 哲學とは何か 河 東 涓譯
- 福澤選 集福澤 謙吉著

- 日本經濟史論 福田 徳三著
- 綱島梁川集 安倍 能成編
- 種の起原 小 泉 丹譯
- ダーキンの自傳及其追憶 小 泉 丹譯
- クロボトキン相互扶助論
- 俗樂旋律考 上原 六四郎著
- 源氏物語
- 平家物語
- 古今集 尾上 八郎校訂
- 金槐集 齋藤 茂吉校訂

- 好色一代男 西 田 萬吉校訂
- 好色一代女 西 田 萬吉校訂
- 西鶴織留 西 田 萬吉校訂
- 當世胸算用 西 田 萬吉校訂
- 日本永代藏 西 田 萬吉校訂
- 奥の細道 伊 藤 松葉字校訂
- 嵯峨日記 伊 藤 松葉字校訂
- 吉野紀行 伊 藤 松葉字校訂
- 諸曲集 野上 豊一郎編
- 上田敏詩抄 上 田 敏著



9-691
7



波岩

終